

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38411

明治四十三年七月三十日發行

十全會雜誌

第五十九號

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第五十九號目次

○原著及實驗

●赤痢病葉室感染ノ一例

上田 計 二

○雜 纂

●種痘法ニ就テ

野田内務技師講演

○抄 錄

●「デアスターゼ」類効力比較試驗成績

波多野常三郎
恩田重信

○校內雜報

●十全會講話部第拾回大會記事

●第四回陸上運動會記事

●弓術部大會

●醫科三年級總會記事

●第十一回北陸醫會

○雜 報

●ドクトル問題ノ解決 ●古弗先生遠逝 ●英京醫況 ●韓國醫談 ●海峽殖民地及印度地方視察談 ●在歐醫學留學生消息 ●明治政府ノ官費留學生 ●精神病院設立建議案 ●學位論文

●松原教授學位受領 ●同博士學位請求論文要旨 ●松原博士學位授與紀念祝賀會記事

○會 告

●會費納付調書

○廣 告

●數 件

雜纂

●種痘法ニ就テ

野田内務技師講演要領

痘瘡ニ對シテ其ノ唯一ノ豫防方法タル種痘ヲ普ク合理的ニ實施シ感染ノ素因アル人民ノ大多數ヲ常ニ免疫ノ狀態ニ在ラシムコトノ必要ナルハ論ヲ俟タス我國ニ於テモ古ク種痘規則ヲ制定シテ種痘ノ普及ヲ圖リタルモ不幸ニシテ時々痘瘡ノ流行ヲ來タセリ即チ

明治十八年	一五、七五九人	明治十九年	七三、三三七人
全二十年	三九、七七九人	全廿五年	三三、七七九人
全廿六年	四一、八九八人	全廿七年	一二、四一八人
全廿九年	一〇、七〇四人	全三十年	四一、九四六人
全四十一年	一八、〇五二人	全四十二年	一八、〇五二人

(内兵庫縣五、八七二人、東京一、六七八人、大阪三、四九二人)

如斯或ル年數ヲ隔テ、一万以上數萬ノ患者ヲ發生シ、其ノ間ト雖年々々少ノ發患アルヲ免レズ其原因ヲ調査スルニ種痘ノ實施上不合理ノ点尠カラズ試ミニ毎年ノ種痘數ヲ見ルニ定期ノ種痘數ハ平均 80% 余之ニ臨時種痘數ヲ加フレバ平均 100% 以上ニシテ毎年國民ノ十分一以上ニ相當シ數上ニテハ頗ル普及セルガ如キモ其ノ内容ヲ調アルニ種痘ノ必要アル者ニシテ之ヲ完了セサル懈怠者多ク、名ヲ疾病事故ニ托シ種痘セサルモノ年々八十万人内外アリ此等ノ懈怠者漸年累積スルニ至リ不幸病毒ノ侵入アルトキ土地ノ狀況ニ依リ忽ニシテ万千ノ患者ヲ發生ス從來斯ル際急遽臨時種痘

ヲ勵行シ辛フシテ應急豫防ノ措置ヲ取り來リタルガ如キ實況ナリ其ノ他種々不合理ノ点アリ(曾テ明治三十一年ニ余ハ種痘及痘苗ニ就テト題シ大日本私立衛生會雜誌其他ノ雜誌ニ論シタルコトアリ)是ニ畢竟舊種痘規則ニ於テハ種痘時期各人區々ニシテ從テ平時義務者ニ對シ強制スルコト困難デアリ又懈怠者ノ督促ニテスル規定モナキ等不備ノ点アルニ基因スルモノト認メ新種痘法ニテハ之等ノ欠点ヲ補ヒタルナリ其ノ主眼トスル所ハ種痘ノ時期ヲ明確ニシ強制ノ方法順序ヲ周到ナラシメ專ラ定期種痘ニ付テ規定シ平時ニ於テ國民ノ多數ヲ免疫狀態ニ置キ殆ント臨時種痘ノ必要ナキニ至ラシムコトヲ期セリ然レモ第十五條ヲ設ケ万已ムヲ得ザル場合ニ處スル爲地方長官ニ認可ヲ得テ之ヲ施行シ得ルノ權限ヲ附セリ、次ニ改正ノ要點ヲ述ベ

定期種痘第一期出生ノ翌年六月マデ、第二期數ヘ年十歳共ニ不善感ナレバ翠年一定ノ月マデニ第二回ヲ行フ

前規則ハ生後一年以内不善感ナレバ更ニ一週年内、再三種ハ五年乃至七年トアリテ其ノ期限ハ各人區々ナリ故ニ督勵上大ニ困難ヲ感スルヲ以テ新法ニテハ時期ヲ一定シタリ而シテ二期トシタル主意ハ學者ノ意見諸外國種痘強制ノ例又本邦從來ノ種痘成績等ヲ參照シタルナリ例之ハ獨逸ニ於テ先年調査委員ノ決議ニ依レバ種痘ノ効力ハ廣キ範圍内ニ動搖スレバ平均十年ノ免疫性ヲ有ストアリ同國ノ法律ハ之ヲ採用シ第二期ヲ公私學校生徒十二歳ト規定セリ匈牙利ニテモ略之ニ倣ヒ第一期ハ第一歳第二期ハ公私學校生徒第十二歳工場徒弟ハ入所ノ時ニ行フ瑞西ノ「カントシ」フライブルグ等ニテモ第二期ヲ十二歳一十五歳南米亦獨逸ニ倣ヘリ

而シテ其ノ種痘スヘキ最終ノ期限ハ法第一條ノ期間内ニテ市町村長之ヲ指定ス即チ毎年三月ヨリ六月ニ至ル間(施第一條)ニテ其ノ期日ヲ指定ス故ニ其ノ期日マデニ任意ノ醫師ニ就テ私種痘(施第三條)ヲナスカ然ラサレバ市町村ノ公種痘ヲ受ケテバナラヌ市町村ハ此後者ノ爲ニ種痘所ヲ開ク筈ニテ

便宜上其ノ最終ノ日ヲ指定期日即チ最終ノ期限ト定ムル筈ナリ又不善感ナル場合ニ第二回ノ種痘ヲ行フベキ期間ハ法ニテハ一八零年六月一ハ同十二月迄トアリ之ハ其ノ後一年以内ト云フ意味ニテ期限ニ差ヲ生シタル次第ナルモ實行上第一期ト第二期トナ別々ニ指定スルハ煩雜ナレバ施行規則ニテハ同時ニ指定スベキトニ規定セリ一般ニ平時ノ種痘時期ヲ春季ニ限リタルハ從來ノ實驗上秋季ニハ殊ニ多數ノ郡部ハ農事等ノ關係ニテ召集困難ナルト二ツニハ種痘ノ成績不良ナルト多シ之レ蓋シ痘苗夏季ノ製造ニ係リ貯藏上ニ不注意等アレバ効力早ク弱リタル等ニ因ルナラン其ノ外郡部ニテハ各町村ノ種痘人員少數ナレバ特ニ之ヲ春秋二回ニ行フノ必要ヲ認メザル故、春季ヲ一般ノ種痘期トナセリ然シナガラ人口多數ニシテ交通ノ繁ナル市街地及ヒ海港地ニテハ十月ヨリ十二月ニ至ル間ニ於テ春季ニ正當ノ事由ニ依リテ漏シタル者又ハ怠リタル者等ニ對シ之ニ期日ヲ指定シテ種痘ヲ命スルノ必要アルヘシ從テ此ノ間ニテ適當ノ時間ニ公種痘ヲ開始スルコトヲ望ム又此ノ時期ニ種痘定期ニ在ル者進ンデ受ケントスレバ之ニ行ヒヤリ又可成之ヲ勸誘シテ種痘セシムルヲ要ス又大都市區(五万以上)ニテハ要種痘兒多數デアリ一年一回トスレバ次年ノ種痘期マデニハ數万千ノ未痘者若ハ免疫期間經過ノ者生ズヘシ(縱令此ノ間ノ多少ノ私種痘アランモ)都會地及海外ト直接交通アル地ニテ或ル時期殊ニ痘毒侵入ノ好時期ニ於テ毎年斯ク多數ノ未痘者ノ存在スルハ危險ナレバ大都市區ニテハ可成毎月一回以上(人員ニ應シ)公種痘ヲ開始セシメ(期日ハ指定セザルモ)定期ニ在ル者(即チ出生後九十日以上經テ者等)ニ勸誘獎勵シテ種痘ヲ行ハセ常ニ未痘兒ノ數ヲ可成少ナカラントニ努ムルヲ要ス、此等ノコトハ規則ノ上ニハ明文ナキモ整理順序ニ記載シ市町村吏員ノ職務參考トシテ曩ニ題牒相成タル次第ナリ又施行規則第一條第二項ハ臨時種痘ニアラス定期ノ特別期日ノ指定ニシテ例之バ特別期日上グル如キコトナリ法第一條第二項ハ八歲九歲ニ善感シタル者ハ十歳ノトキ種痘ヲ命スルモ殆ンド總テ不善感ナルベクレバ之ヲ第二期ト見

(雜纂)

做スコトノ規定デアル
 次ニ要種痘者ハ未成年者殊ニ小兒ナレバ法律上其ノ義務者ヲ確定セザバナラヌ法第二條ニテハ種痘ヲ受ケシムル義務ヲ其ノ保護者ニ負擔セシメ尙法第三條ニ於テ第二ノ義務者ヲ規定セリ即チ法第三條ニテハ小學校、育兒院等ノ首長又ハ未成年者ヲ寄宿セシムルモノハ生徒、院生、未成年者ヲシテ種痘ヲ受ケシムルカ又ハ其ノ保護者ヲシテ履行セシメザルヘカラス此義務ハ連帶ナレバ協議ノ上何レカニテ種痘ヲサセズバナラヌ然ラザレバ共ニ罰セラル第四條ハ法施行後即本年一月一日以後ニ新ニ第三條ノ關係ヲ生シ又ハ新ニ保護者トナリタルモノ例之ハ本年一月以後ニ養子ヲナシ若ハ、後見人ニナリ、又ハ小學校、幼稚園等ニ新入生アリ、未成年ノ下女、子守、小僧、ヲ雇入レタル等ノ場合ノ規定デ(但シ此等ノ未成年者ハ昨年マデニ種痘定期ノ十歳ヲ經過セザルモノ) 既往ノ種痘濟否ヲ調べ未痘者ナレバ六月以内ニ種痘セシメ又第一期ハ了セルモ第二期未了ナレバ之ヲ行ハシメル、之モ保護者ト連帶責任ナリ但シ之ハ隨時生ズル問題アル故、最近ニ公種痘ノ開始ナキカ又ハ私種痘センニモ時季ニ依テハ郡部ノ醫師ノ許ニ痘苗ナキコトモアルベキニ付期限ヲ六ヶ月内ト擴メテ、尙行ハセ難キ事情アレバ市町村長ニ之ヲ届出ツレバ義務ヲ了スルノテアル市町村長ハ此ノ者ニ對シテハ直ニ若ハ最近ノ公種痘期ニ種痘スル新法ハ種痘ノ濟否ヲ明ニシ未種痘者ニ速ニ之ヲ督勵シ得ル爲メ第一期種痘ハ之ヲ戶籍簿ニ符號ヲ以テ記入シ或ル時期(數ハ年二歳ノ十二月)ニ符號ナキ者ヲ調べ戶籍吏ハ市町村長ニ通知シ、市町村長ハ其現住所ヲ調べ次回ノ公種痘施行期ニ期日ヲ指定シテ種痘セシム、之ハ第一期ノミナリ、第二期チモ記入スルコトハ希望スベキナルモ頗ル煩雜ニシテ容易ノ業ニアラズ第二期ニ就テハ他ノ方法モアルベキヲ以テ之ヲ割愛セリ特ニ第一、第二ニ輕重ヲ付セルニアラザレバ今日外國ニ於テ強制種痘ハ第一期ノミニテ甘シ居ル處アル程ニテ強テ比較スレバ第一期ニヨリ多クノ重ヲ措カザルベカラズ即チ苟モ將來(昨年出生以後ノ)

國民タルモノハ必ズ戸籍簿中ニ此ノ符號ヲ有セザルヘカラザルナリ、第二期ハ文部省ニ協議シ學齡簿(便宜第一期ヲモ)ニ記入シテ貫ヒ、荷クモ我國ノ學令兒童タルモノ法定種痘ノ未了者ナキナリトス、然レモ無籍者アリ又學令調査ニ漏アリ此等ノ中ノ未種痘者ヲ調べル爲ニハ他ニ方法ナカルヘカラズ、前述ノ雇人等(小僧、子守、下女、女工、徒弟等)ニ對シ屋主等ヲ準義務者トナシタルモノヲ補フ一方法アリ又時當該吏員ガ戸々ニ就テ調べ(法十四條)種痘済証又ハ種痘証若ハ之ニ代ルベキ証ヲ調ヘテ未種痘又ハ懈怠者ヲ發見シ更ニ期日ヲ指定シ又ハ強制シテ勵行セシムル筈ナリ、此ノ法第十四條ノ但書ニ付テハ施行規則第十二條ニ規定アリ、痘瘡經過証、猶豫証ヲ有スル者ノ外、種痘済証又ハ種痘証ヲ所持セザル者ハ學校等ノ証書ノ種痘ノ記事アル者ヲ示シ、又ハ戸籍ノ謄本、抄本(第一期ニ付テ符號アルモノ)若ハ市町村長ノ証明書ヲ示シ又ハ癩痕ヲ以テ証明シ得レハ種痘ノ証ヲ提示セザルモ可ナリ

前述ノ如ク種痘懈怠者ニ對シテハ戸籍簿ニ依リ學令簿ニ依リ、法第三條第四條、第十四條等ノ規定ニ依リ、其ノ完了ヲ期スル筈ナルモノ、之ハ一ノ未了者アリタル場合ニ之ヲ漏サザル關門タルモノニシテ市町村長ニシテ合理的ニ種痘ヲ施行セシムルハ常ニ懈怠者ナキナリトスルヘカラス、現ニ近年ノ明治四十、四十一年ノ流行ニ徴スルモ

神戶 五、二五人中 五才以下ノ小兒 二、四四人(四七%)
 大坂 三、三四一人中 同 一、一二九人(三三%)
 東京 一、六四一人中 同 六九九人(四三%)ニシテ、
 五才以下ノ小兒ナリ、又是等ガ感染ノ素因ニ富メル故多クハ初メニ犯サレ即チ是等ガ源トナリテ毒力ヲ強クシ後ニ他ノ比較的素因乏シキモノモ侵サル、ニ至ル故ニ是等ヲ早ク免疫ノ状態ニ置クコトガ最モ肝要ナリ、然ナキダニ大市街地ニ於テハ月々ノ出生者少ナカラズ法定ノ期日迄ニハ多數ノ未痘者蓄積ス故ニ毎月一回以上ノ種痘施行ヲ望ム程ナレハ毎年要種痘

ノ人ヲ二月迄ニ可及的精シク調査シテ種痘簿又ハ種痘票ヲ作り、調製後ニモ之ヲ加除訂正シ之ニ種痘ノ成績ヲ記入シ、未了者ハ可成速ニ催告シテ完了セシムルヲ切望ス

新法ト前規則トノ關係ニ付テハ前規則ハ初種、再種、三種ナレハ第一期第二期トノ關係不明カニセザルヘカラス、即チ前規則ニ依リ數ハ歳七歳前ニ種痘ノ証跡(善惡ニ拘ラス)アル者ハ第一期、又種痘セシムル確カナルモ時期不明ナルモノハ七歳以前ト認メ亦第一期ト見做ス、八歳以後ニ種痘ノ証跡アルハ第二期ト見做ス又法第四條ニ關シテハ昨年迄二十歳ヲ過ギタ者即チ本年十一歳以上ノ養子女又ハ小僧、子守等)ナレバ生來未種痘ナルカ又ハ其ノ証跡不明ナル場合ニ新保護者ナリ準義務者ノ保護者ト連帶カ種痘ヲ行ハセレハ法律上ノ義務ヲ了スルナリ

種痘ノ成績ハ前述ノ如ク戸籍簿、學令簿ニ記入シ又實際ニ於テハ市町村ニ於テ帳簿等ニモ記載シアルベキモ個々ノ人ニ就テ準義務者ガ調査シ又當該吏員調査ノ際必要ナル故種痘ヲ檢診シタル時(其ノ當日)証書ヲ渡ス、公種痘ニテハ種痘済証ト云ヒ(市町村長ハ醫師ナラサレハ種痘証ト稱セス)醫師ノ交付スル種痘証ト稱シ各其ノ様式ヲ定メタリ、其ノ市町村ノ用紙等ニ赤青白ヲ規定シタルハ獨乙ニハ例アリ戸々ニ就テ調べルニ非常ノ便宜アリテ別ニ費用ノ点ニモ大ナル差ナキニ依リ、但醫師ノ種痘証ニハ此ノ色ヲ定メザルハ強ルコト能ハサルヲ以テナリ故ニ可成ハ市町村ノ有用紙ニ做ヒ第一期ハ赤、第二期ハ青、其ノ他ハ白トセラルレバ當局者ノ大ニ感謝スル處ナリ尙出來ベク市町村ニテ醫師ノ分ヲ印刷シ無償ニテ頒ツコトヲ望ム

痘瘡經過証モ前述同様ノ理由ニテ交付ノ必要アリ(制裁ナシ市町村ノ醫師之ヲ與フヘシ)檢診ハ期日ヲ指定シ第六日―第八日ニ行ヒ公種痘ニテハ事由アレハ届出サセ然ラスシテ出頭セザレハ二十圓以下ノ科料アリ、之レ其ノ成績ヲ見ルハ施行上必要アレハナリ、私種痘ニテモ檢診ハ第六―第八日

ニ指定ス但シ法ノ上ニテハ見セニ來タ者ヲ檢診スレハ可ナリ然レモ無論其ノ成績ヲ知ル必要アレハ同シク(指定ノ期日ニ)檢診ニ來ラシムル様諭示スルヲ要ス、種痘ヲ受クルモ檢診ヲ受ケス証書ナケレハ法律上無効ニナル虞アルヲ以テナリ(戶籍上未種痘トナル且ツ指定期日ヲ過レハ罰セラル唯當該吏員ヨリ証書ノ提示ヲ求メラレタル場合ニ癩痕アレハ証書ノ提示ヲ要セサルニ過キス)又他ノ種痘シタルモノヲ檢診スルハ妨ナシ然レドモ善感ナラザルモノハ証不明ナレハ謝絶スヘシ不明ナルニ拘ラス証ヲ出スハ虚偽ナルヘシ、檢診セザレハ証ヲ交付シ得ズ(法第十六條)、種痘証ノ交付ニ就テ特ニ醫師ノ注意スヘキ点ハ交付スヘキ者ニ交付セザレハ罰アリ又交付スベカラサル者ニ交付スレハ虚偽ノ種痘証トナルヘシ左ニ

- 一、數ハ歳七歳マテニシテ未種痘又ハ種痘ノ証跡不明ナル者ノ種痘ハ善感不善感ニ拘ラス第一期ト看做ス
 - 二、數ハ歳八歳九歳ニシテ未種痘又ハ種痘ノ証跡不明ナル者ノ種痘ハ不善感ナレハ第一期ノ第一回ト看做ス從テ次年ノ一定ノ期日マテニ第二回ヲ行フヘシ
 - 三、數ハ歳八歳九歳ノ者ノ種痘善感ナレハ第一期ノ了否ニ拘ラズ第二期完了ト看做ス
 - 四、數ハ歳十一歳乃至滿二十歳(第一期ノ了否ニ拘ラス)ニシテ第二期種痘未了若クハ其ノ証跡不明ナル者ノ種痘ハ善感不善感ニ拘ラズ第二期ト看做ス
- 次ニ新法施行前ノ種痘ノ關係ニ就テ注意スヘキ点ハ法施行前即チ昨年以前ニ於テ數ハ歳八歳後ニ確ニ種痘ヲ受ケタル証跡(善感不善感ニ拘ラス)ア

(雜纂)

ル者ハ第二期完了ト看做スヘキヲ以テ此等ノ者假ニ本年十歳ナリトモ法律上ニテハ種痘ヲ行フヲ要セス、從テ若シ任意種痘ヲ受ケルトモ定期外ナレハ種痘証ヲ交付スベカラス(種痘証ノ色ニ付テ)

前述ノ諸問題ニ就テ既往ノコトヲ調査スル場合ニ保濟者等ノ陳述ハ參考トハナスヘキモ之ニ符合スヘキ証跡アルニアラサレハ其ノ陳述ヲ信用シ難シ即チ証跡不明シテ法律上未了者ト見ルヲ至當ト認ム次ニ定期外種痘ヲ受ケタル者自己ノ便宜上証ヲ請フトキハ定期外種痘証明書ヲ與フルハ妨ナシ、但シ法律上殆ンド無効ナルヘシ又以前ニ確ニ種痘ヲ受ケタル者証書亡失等ノ爲再交付ヲ請ヒタルトキ帳簿ニ確ニ記載シアレハ之ニ與フルハ可ナリ証書再交付ノトキハ其ノ旨ヲ裏面ニ朱書セシムルヲ要ス

施行規則第十二條ニ市町村長ノ証明書トアルハ種痘濟証ノ様式ニ於テ常ニ再交付ヲ爲シ難キ場合アルヘキヲ以テ簡單ニ種痘義務完了ノ証明書ナルモノヲ認メタルナリ

尙一言シタキハ私種痘ノ成績ハ届出ノ必要アレハ醫師ハ種痘証ト共ニ可成届書式ヲモ與フル様希望ス尙進ンデ義務者ニ代リテ届出ノ手續ヲモ了スレバ愈親切ナルベシ

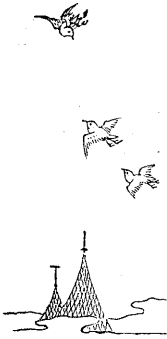
終ニ施術心得ニ關シテ一二述ヘタキハ切種式ノ刺種式ニ優レルハ今更ラ辨明ヲ要セス市クハ醫師會等ニ交渉シ切種式ニ據ラシムル様努メラレシコトヲ、公種痘ニ於テ必要アルトキハ監督權ニ依リテ切種式ヲ實行セシメラレシコトヲ望ム、接種數ヲ第一期四切乃至六切トシ第二期六切ト定メタル主意ハ四願以上ノ完全ナル發痘ヲ期待センガ爲ナリ、曾テ「ロンドン」市痘瘡流行ノ際彼ノ有名ナル「ストツクウヰル」病院ニ於テ收容患者三千八十八人ニ就テ種痘癩痕ト死亡率トノ關係ヲ調査シタル成績ヲ見ルニ次ノ如シ。

患者數	種痘癩痕ノ數(性)	死亡率
七〇三	無シ	四七、五%
五一六	一個(不長)	二五、〇%

六三二 一個(良) 五、三%
 六七七 二個(良) 四、一%
 三〇一 三個(良) 二、三%
 二五九 四個以上(良) 一、一%

又英醫マルソン氏ノ調査成績モ略之ニ同シ即チ未種痘ノ死亡率ハ三五、〇%、一個ノ不良癍痕アリシ者ノ死亡率ハ二一九、一%、一個ノ良癍痕アリシ者ハ三、八三%、二個ノ不良癍痕アリシ者ハ八、三四%、二個ノ良癍痕アリシ者ハ二、三二%、三個ノ良癍痕アリシ者ハ一、九四%、四個以上ノ良癍痕アリシ者ハ〇、五五%ニシテ即チ四個以上ノ善良ナル癍痕ヲ有スル者ハ免疫ノ度高ク假令罹病スルコトアリトスルモ輕症ニシテ死亡率少數ナルコトヲ示セリ、本邦ニ於テハ這般ノ調査充分ナラサルモ學理上斯ル關係ノ存スベキハ疑フ處ナシ故ニ四顆以上ノ發痘ヲ期センガ爲メ斯ク規定シタルナリ又第二期チ左側トシタルハ腺腫ヲ生シタル場合ニ學齡兒童ハ執筆等チ妨ゲサラシメン爲ニシテ第一期チ右側トシタルハ數ヘ歳ニ歳ノ小兒ナレハ一側六切ハ差支ナク一歳ノ小兒ト雖モ一側ニ四切ヲ施スハ差支ナシト認メタルニ依ル、尙後日癍痕調査ノ場合ニ參考ニ資スルノ便アルベシ

善惡不善惡ノ判決ニ就テ第一期ニ在リテハ一顆ノ發痘チ不善惡ト定メタル主意ハ免疫不完全ニシテ之チ數ヘ歳十歳ニ至ルマテ放置スルハ痘瘡豫防上危險ト認メタルニ依ル(其ノ他細事ノ説明ハ省略ス)



抄録

「ヂアスターゼ」類效力比較試驗成績

陸軍三等藥劑正波多野常三郎恩田重信兩氏が「ヂアスターゼ」類效力試驗を行はれたる成績は軍醫團雜誌に掲げられたるが、其全文左の如し

- 「ヂアスターゼ」類效力比較試驗ノ目的ハ汎ク販賣シタル「ヂアスターゼ」類ノ澱粉ニ對スル糖化作用ニ就キ效力ノ優劣チ比較判定スルニアリ試驗ニ供シタル品種ハ左ノ十一種トス
- 一 タカヂアスターゼ TAKA DIASTASE
 - 二 デグستن DIGESTIN
 - 三 日本ヂアスターリン NIPPONDIASITALIN
 - 四 柏木ヂアスターゼ FASHIWAGIDIASTASE
 - 五 マルヂアスターゼ MARUDIASTASE
 - 六 小林ヂアスターゼ KOBAYASHIDIASTASE
 - 七 日本藥局ヂアスターゼ DIASTASE 佐藤
 - 八 日本藥局方ヂアスターゼ DIASTASE 不明
 - 九 マルツヂアスターゼ MALZ DIASTASE
 - 十 糖化素 TOKASO
 - 十一 デアスニプターゼ DIASPEPTASE

澱粉溶化力試驗方法

第一法 日本局方規定ノ方法ニ據ルモノニシテ則チ百度ノ温ニ於テ乾燥シ

タル馬鈴薯澱粉六「グラム」ニ水三十立方「センチメートル」ヲ注加シ能ク振盪シテ平等ニ水ト混和セシメ爾後沸騰蒸餾水七十立方「センチメートル」ヲ注加シ時々振盪シツ、三十五時間重湯煎ニ浸シ加熱シ平等ノ糊液トナシ五十度ニ冷却セシメタル後檢體〇、一「グラム」ヲ加ヘテ溶解セシメ五十度ノ温ヲ保ツ所ノ重湯煎中ニ浸シ時々動搖シツ、六時間放置シテ得タル溶液十立方「センチメートル」(澱粉〇、六「グラム」ニ相當ス)ハ五十立方「センチメートル」ノ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色セザル可カラザルモノニシテ即チ日本藥局方ハ六時間以内ニ三十七倍以上ノ「マルトール」ヲ生ズルヲ以テ藥用ニ供スルニ足レリトセリ故ニ日本藥局方規定ノ「ヂアスターゼ」ハ甚ダ低度ノ糖化力ヲ有スルモノトス

第二法 馬鈴薯澱粉三「グラム」ヲ糊化シ百五十立方「センチメートル」トナシ之レニ檢體〇、〇三「グラム」ヲ投加シ四十度ノ温ニ於テ重湯煎中ニ浸シ時々振盪シツ、放置シ十分時間ヲ經ル毎ニ糊液四立方「センチメートル」ヲ試驗管ニ取り沃度溶液一立方「センチメートル」ヲ加ヘ澱粉ノ反應ヲ呈セザルニ至ル迄ノ時間ヲ測定シ溶化力ノ優劣ヲ定ム右ノ分量比例ニ由テ試驗スルニ一時間以内ニ澱粉ノ反應ヲ認めザルニ至ルトキハ該「ヂアスターゼ」ノ溶化力ハ百倍トス右ノ試驗ニ依リ其力百倍以上ト認ムルトキハ檢體〇、〇三「グラム」ヨリ少量ヲ加ヘテ試驗シ其ノ效力ヲ定ム

各種檢體ノ成績

(一) 「タカザアスターゼ」類黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ微ニ白色ノ沈渣ヲ殘シ溶解シ淡褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナシ第一試驗方ニ從ヘハ容易ニ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十五分間ニテ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時二十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ效力アルモノトス

トス

(二) 「ヂグスチン」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ殆ド全ク溶解シ褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗方法ニ從ヘハ容易ニ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニ溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ效力アルトス

(三) 日本「ヂヤタスリン」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ殆ド全ク溶解シ褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗方法ニ從ヘハ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アル者ト認メシヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時間ヲ要シ優ニ二百倍ノ澱粉ヲ溶化スルノ效力アル者トス

(四) 柏木「ヂアスターゼ」類黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ニハ微ニ白色ノ沈渣ヲ殘シ溶解シ淡褐色半透明ノ液トナリ之レニ沃度液ヲ加フルモ變化ナク第一試驗方法ニ從ヘハ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ四十分間ニテ全ク溶化シ百倍以上ノ溶化力アルヲ認メタルヲ以テ更ニ〇、〇一五「グラム」ヲ以テ三「グラム」ノ澱粉溶化ニ要スル時間ヲ測定スルニ一時二十分ヲ要シ約二百倍ノ澱粉ヲ溶化スル效力アルモノトス

(五) 「マルザアスターゼ」淡黃白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フルハ多量白色ノ殘渣ヲ析出シ之ニ沃度液ヲ加フルハ藍赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェエリソグ」溶液ヲ脱色シ溶化力廿七倍以上ヲ徵シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ澱粉ヲ溶化スルニ五時

間ヲ要シ其効力ハ卅七倍以上百倍以下ニアル者トス

(六) 小林「デアスターゼ」淡黄白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量白色ノ殘渣ヲ析出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ノ反應ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色セス第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ八時間ヲ經過スルモノトス

(七) 日本藥局方「デアスターゼ」(佐藤製造)淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ析出シ之ニ沃度液ヲ加フレバ淡赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヒハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徴シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ七時十分ヲ要シ其ノ効力ハ三十七倍以上百倍以下ニアルモノトス

(八) 日本藥局方「デアスターゼ」(製造者不明)淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ析出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徴シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ七時四十分ヲ要シ其ノ効力ハ三十七倍以上百倍以下ニアルモノトス

(九) 「マルツナアスターゼ」淡黄白色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ析出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ淡赤色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色シ溶化力三十七倍以上ヲ徴シ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ六時十分ヲ要シ其ノ効力ハ三十七倍以上百倍以下ニアルモノトス

(十) 糖化素淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ析出シ之レニ沃度液ヲ加フレバ藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色スズ第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニ

テ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ八時間ヲ經過スルモ能ハズ故ニ本品ハ日本藥局方不適ノモノトス

(子) 「デアスターゼ」淡褐色ノ粉末ニシテ固有ノ臭氣ヲ有シ水ヲ加フレハ多量ノ白色殘渣ヲ析出シ之レニ沃度液ヲ加フレハ藍色ヲ呈シ第一試驗方法ニ從ヘハ「フェリンゲ」溶液ヲ脱色セス第二試驗方法ニ從ヒ本品〇、〇三「グラム」ニテ三「グラム」ノ濃粉ヲ溶化スルニ八時間ヲ經過スルモ能ハズ故ニ本品ハ日本藥局方不適ノモノトス

「デアスターゼ」類糖化力ノ試験
検査ニ供シタル「デアスターゼ」類品質ノ概要ハ前記ノ試験ニ於テ已ニ明カナルモ此ニハ就中品質優等ノモノ四種ヲ選ヒ濃粉糖化作用ノ優劣ヲ比較調査セリ

試験ノ方法ハ檢體〇、〇一「グラム」ヲ四十度ノ温ニ於テ一時間一「グラム」ノ可溶性濃粉糊ニ作用セシメタル後此ニ生成セル「マルトーゼ」ノ量ヲ「ワイン」氏法ニ依リテ検査シ檢體ノ可溶性濃粉ヨリ生成セル「マルトーゼ」ノ百分率ヲ以テ其ノ糖化力ヲ示スニ左ノ如シ

柏木デアスターゼ 五二、二二 デゲスチン 四六、五〇
日本デアスターリン 六五、四四 タカサスアターゼ 三八、五六

蛋白溶解力試験

「デアスチン」ハ蛋白質及膠質等ニ作用シ之ヲ消化スルノ能力ヲ有スト稱スルヲ以テ「ペプシン」「パンクレアチン」「パバイン」ト比較試験ヲ爲ス試験ノ方法ハ第三版日本藥局方所載ノ方法ニ據リ檢體〇、一「グラム」ヲ水百立方「センチメートル」及磷酸〇、五立方「センチメートル」ノ混液ニ溶解シ之レニ鶏卵白ノ十「グラム」ヲ加ヘ四十五度ニ於テ應振盪スルニ二時間以內ニ殆ド全ク其卵白ヲ溶解スルモノハ獨リ含糖「ペプシン」ノミニシテ其ノ他ハ之ヲ溶解スルモ其量僅微ニ過ギザルモノト認ム

牛乳蛋白質消化力試験

「チゲスチン」ノ牛乳蛋白質消化力ヲ試験スル爲メ本品〇・二「グラム」ヲ取り微温湯十立方「センチメートル」ヲ加ヘ之ヲ溶解セシメ之ニ豫メ蛋白質ヲ定量シタル殺菌牛乳十「グラム」ヲ注加シ二時間十八度ノ温ニ放置シタル後直ニ煮沸シ消化作用ヲ殺菌セシメ冷後硫酸亞鉛ノ濃厚液ヲ加ヘ此ニ析出スル未消化蛋白質ヲ「キールダール氏」法ニ據リ定量シ先ニ使用シタル牛乳中之ニ含有スル蛋白質ノ全量ヨリ差引キ本品ガ何倍量ノ牛乳蛋白質ヲ消化スルヤヲ算出シタルニ五・五倍ヲ消化スルヲ證明ス

白阿膠液化試験

膠質液化力ヲ試験スル爲メ「チゲスチン」含糖「ペペシン」「バンクレアチン」「パパイン」ヲ取り其ノ能力ヲ比較セリ

試験ノ方法ハ白阿膠十瓦百ノ熱湯ニ溶解シ冷却シテ四十度トナシ之ニ檢體〇・一「グラム」ヲ加ヘ振盪シツ、放置シ白阿膠ヲ完全ニ液化セシムルニ要シタル時間ヲ測定スルニアリ其ノ成績ヲ表示スレハ左ノ如シ
パパイン 一時間 チゲスチン 一時間十分 含糖ペペシン 八時間
ニテ尙消化セス バンクレアチン 同上

* * * * *

校 内 雜 報

●十全會講話部第拾回大會記事 (五月二日)

五月二日濟々堂で開催(午前十時より)

(校内雜報)

○開會の辭

鬼頭部 長

○保壽と精神

柴野順 吾君

精神の活動は吾人の壽命を保つものあり而して精神を活動せしめんせば宜しく悠々浩然の氣を養ふべしと論ぜらる

○僥倖心と冒險心

松江常 行君

僥倖心と冒險心を解剖して之を評し結論して曰く

「成効は尋常の道にあり一の困難に打ち勝ちて一の成効を得え自然の理にして偉人たらんと欲するものは須らく此道を探るべきあり」

○満足

會我逸 雄君

不平不満は自己を買ひかぶりたる結果ある事多し吾人青年學生は其境遇を自覺し其分に満足して怒力奮勵すべきものあり

○「デモンストラチオン」

鬼頭 教授

昨日北陸醫會に出席せられたる福井縣某特志家より寄贈せられたる標本二あり再び之を本日供覽して其好意に酬ひんさす

A. 腦水腫

産婦は福井市の人あり妊娠中に異常ふし分娩は足位にして兒頭正規よりも大にして娩出困難あり爲に或醫師斷頭術を行へり而して頭のみ子宮に遺殘す乃ち某氏右頸顱部を穿開して腦質及腦漿を排除して兒頭を娩出せしめたり手術は容易かりしと云ふ頭周圍四八仙米にして正規より十五仙米の増加あり(此際ゴム管を以て空氣を頭蓋内に送入して其如何に大かりしかを示さる)元來骨盤は其廣さ定まれり從て此如く兒頭大ある時は分娩障害あるは理の然る所あり幸に陣痛の爲に壓迫せられ縫合には總門が破れて都合よく娩出せらるゝ事あれど然らぬ際には穿顱術を施して内容排除の上娩出せしめざる可らず

B. 三胎兒の胎盤

本標本に就ては妊娠經過及分娩經過に就ては別に委しき事を聴かざりき

生れたる三兒は一は大一は中一は小なり而して臍帶も夫々兒の大きに適合せり云ふ而して一人は女性他の二人は男性なり三兒共に娩出後鬼籍に入れり云ふ

總て多胎妊娠に於ては一卵性二卵性三卵性を區別し得本例に於て性の異なるは一卵性からざる証あり而して各胎盤は連絡せり二卵性の際に於ては胎盤連絡せず外觀上連絡せるが如く見ゆるも血管の吻合なきものより一卵性のものは連絡あり本標品は外觀上相つおがれり即一寸考ふれば一卵性の如しと雖其性に差あるを見れば二卵性以上のものなる事明らかなり

● 神経系統の官能的區分

佐 口

榮君

神経系統を研究せんとするに當りては單に其構造のみを以て満足すべからず必ずや之を官能的に調ぶべきなり動物は外界に適應せざる可らず從階級の生活の状態に應じて神経系統の發達を認むるなりとて之より其歩を進めツヨソソソ氏の分類法を示して大に論ぜられたり

△ 午 食

午後一時より

● 氣壓と疾病

竹多乙三郎君

調査研究せられたる所に就て述べられしも時間の都合上結末に至らず大に遺憾とする所あり從て茲には其概要を記す事も見合せたり乞ふ之を諒せられよ

● 水酸基を有する有機化合物の性状

臨 坂

講 師

● 蕃山先生と王學

川 島

俊君

本年は蕃山先生の二百五十年忌あり余は現今一般の社會の趣味の低落せるを嘆くものあり聖人君子乃至偉人の肖像を床に掲げ日々之を崇敬し且つ儂を偲んで精神修養の一端となすは一種の趣味を感ずるものにして余は先生の命日には必ず心許りの饌を供へて拜し以て一日の洗心を得るなり先生の偉大なるは運命の如何によりて立脚点を左右せざりし点あり王學者中著明

なるもの少ふからずと雖蕃山先生は一頭地を抜きたり蓋し先生の人格其巧績は學生諸君に於ても欽慕すべき点少からざるを信す

● 原發性大陰唇癌腫の一例

鷹 見 義 郎君

緒言として外陰部癌腫の場所及統計的關係を述べられ猶外陰部に於ける癌腫の症候經過診斷及療法等に就て畧述し尋で實驗例を述べらる

● 標本供覽

上 田 教 授

A 細菌の生活狀態

單糖重糖複糖を分解し酸を生ずるものあり又生ぜぬものありエンチームは各の菌によりて差異あり今日にては菌の是等の生活狀態によりて細菌の種類を鑑別するを得るに至れり

B 醱酵試管驗

此の内に細菌を培養し一は瓦斯の發生あるもの一は發生せぬ

C 「シャール」内の培養基を「ラクムス」にて染め之に二種の菌を場所を異にして植へ酸を生ずるものは其部分赤色にふり酸を生ぜぬものは其部分色を變せず之は腸チアス菌赤痢菌を分離するによるし

D ヘモグロビンメーター

E 凝集反應と溶解狀態

北陸醫會に出席當當地醫况視察の爲來澤中の三共の理事ドクトル山谷徳治郎氏山崎教授の紹介の下に登壇せられ左の演題に就て講話あり其梗概を摘記せん

● 獨乙留學談

山 谷 徳 治 郎氏

余が醫海に出しは已に二十年の昔なり當時は吾國の醫界幼稚にして細菌學的觀念の如き實に薄きものなり俄然洋行さふり醫學の準備なく大に苦心を極めたり留學生間には「ドクトル取り」なる語ありドクトルを得んとするものなり余はアルバイトを爲す程の準備もふく從て「ドクトル取」を試みたり前述の如く醫學には大に閉口せり而して之は余一人のみならず他の人々

も無益の金と心配を爲し遂に中には懷郷病を起し彼地の習慣風俗に全化し得ざるものあり

元來語學は之を西洋に徴するに小國の人民は天才的なり亡國の民亦然り吾日本人は語學的天才の素質に乏ししが如し亡國からぬは賛成されども語學の出來ぬも困つたものあり余は留學せんとする人に忠告す少くも専門の獨乙書を讀み得るかさ歪なりにも已の意志を先方に通ずる事を得る位の文章を書く力とは日本に於て習得し置くべきものなり猶留學して「アルバイト」を試みんせば「ントーデー」等日本に於て知り得る事は皆頭腦に入れて行く事必要あり

語學の出來ぬ程不便にて辛き事なし余は飽までも留學せんとするものは出來るだけ語學を修めて行くべしと云はんと欲す

猶語を進めてドクトル試験の狀況に就て詳説せられ次で所謂ドルトル問題に就て述べらるゝ處あり在東京ドクトル會は大に活動を開始せり而して各方面へ向つて飛徹し運動の法を講じつゝある處あり述べて降壇せられたり

○亞利加の病院

松原 教授

米國に於ては日本に於けるが如き病院の外に専門病院あり尤も吾國にも精神病院あれども完備したりとは云へず肺病々院の如きものも吾國に於てはあまり聞かざる處あり米國には各洲毎に公立肺病々院あり醫者も看護婦も肺結核の患者あり而して此病院は初期のもの又は輕快の見込あるものを收容するものあり又兒童癱瘓疾病院あり又種々の研究所あり癩腫研究所の如き其一例あり而して必ず年報を發行す又市郡等にて設立せる一般病院あり之には完全なる研究室を有し専門の病理家が血液大便尿等の検査を爲す少し大なる病院には病理家二人あり又市縣の衛生課の技師も夫々アルバイトに従事す而して年報を出す

精神病院の發達は大に注目すべき處からずばあらず吾國には菓鴨に精神病

(校内雜報)

院あれど一般精神病院あり米國に於ては精神病院更に分れ居れり本來精神病は其豫後の良なるものと不良なるものを別の病院に收容治療又は保護すべきものあるを以てあり

以下主に精神病院に就て述べんす先大別して四種とするを得尤もElliottには紐育に公立の白痴病院あり癩癩病院(紐育に公立のもの一つ)中酒病院(マサチューセツツ州ボストン)には獨立せるもの一つあり而して精神病のものさ然らぬものとを區別せり)犯罪性精神病院(之に貳種あり犯罪の時已に精神病のものも收容するに犯罪後精神病にありたるものを收容するものさあり之は紐育にあるものあり)神經病院(官能的器質的災害的)猶精神病院にして急性に治癒する望あるものは精神病治療院に入れ不治のものは精神病看護院に收容す

其外 Colony Hospital なるものあり慢性精神病患者にして農、工等の職のものを集めて一殖民地的生活を營ましむ之はマサチューセツツにあり最も進歩せるは家族看護法にして家族的生活を營ましむ之は頗る大規模にして其法の完備せるは米國の特色あり

又町の中に一時精神病患者を收容して之を夫々送るべき所へ送る設備あり軍隊精神病院精神病院研究所有り殊に後者は獨立して紐育にあり之は公立の精神病院及犯罪病院より送り参りたる材料に就て研究する所あり

○脾瘧の本態

岡本 京太 郎君

病理解剖化學及動物試驗的研究を経たるものにあらざる事を一言斷はつて置くに述べられて本論に移る

本病を獨立の疾病と做や否やは説の分るゝ處にして又一つの病とするも何系統に屬する病かと云ふ点に就て論多し今假に獨立せる病として論ぜんす余は本病を次の七点より考究せり

- 一、臨床的症狀
- 二、年齢
- 三、營養物と本病との關係
- 四、貧富の關係
- 五、場所と本病との關係
- 六、氣候との關係
- 七、治療法との關係(各項

目に就て詳論せられたれど都合上畧す乞ふ讀者之を諒せられん事を)

以上七項の事實により余は本病は營養的なる事を信するものなり
 本病は特異の病なるやと云ふに三論あり一は症狀群あり二は獨立の病なれど或病の異名あり三は獨立のものなりと云ふ(之に就て氏は一々詳論されしも略す)即各論據を構へて之を守る然れども氏は詳論の結果本病は獨立の疾病なりと論ぜられたり

之より本態論ふれど時間の制限あるを以て壇を下られたり

○白点状網膜炎の一例

玉森 法 靈君

本病は稀有の疾病にして僅々十有六例の報告を見たるのみ(本病發見以來)本邦に於ては井上豊太郎氏の報告あり當地方のを除きて僅二三例あり高安博士は本病の四例を報告せられたり余は昨年度十一才の女に於て之を見たり患者は伯父と姪とが結婚したる間に生れしと云ふ(中略)色素性網膜炎と本病との關係に就て論じ最後に血族結婚者の兒が幼時白点状網膜炎にかゝり年齢長じて色素性網膜炎を起し得るものにあらざるか本病の豫後に就ては余の例は不良なり故に失明する場合もありと云ひ得べしと述べられたり

○獨乙醫育談

佐々木 教授

開講は早くとも四月二十四五日遅きは五月に入りて開講す
 學課表教授は己の勝手に開講の時間を定む即學生は自己の都合のよき様に聽講時間表を作る

教授の撰擇一學課に澤山教授あり故に之を撰ぶる初め開講七日間は無料聽講をふし此間に教授を撰ぶ教授には正副あり正教授はクリニツクのみあり而して學生と教授の間は親密なれども一種狹すべからざる点あり
 實習總て實地的なり何れの學科にも實習あり而して小ふる學校にても施療患者百大なる所にては子を算す從て研究材料に不足なし
 在學年限一般に五少年ふれども之以上にふり居るやも知れず

轉學自由よりよき處へ行き得るあり都會の學生が田舎の大學へ轉するものも多し之よき教授あるを以てあり
 試驗五ヶ年中二回第一は理科試問にして入學二ヶ年以後に之を受く(動、植、理、化、解、生)第二は卒業試驗あり之は五ヶ年以上在學の証明によりて受け得るあり期日も學生の隨意あり課目は第一試驗外のもの、中の幾分に就て行ふあり

開業試驗最初に先ドクトル試験をすまして開業試験を受くる様なり居りしも近來は開業は試験を先にする様になりたり口答にして左程困難ならざるが如しドクトル試験を受くるには論文を製作す之は科目を撰び教授指導の下に作るあり

入學料十八馬克にして受験の度に受験料を拂ふ規定ありドクトル試験を受くるには約五百馬克を要す云

月謝隨分高し一學期(六ヶ月)一學科に對し三〇―四〇馬克を拂ふ
 實習料最も高きは七日間毎日一時間にて一學期一學科に一〇〇馬克を拂ふ
 其他試験自辨あり

要するに獨乙は自由にして而も實習多し月謝高し自由教育あるものは被教育者の意志堅固にして自由を解せる時に於て其光輝を發するものなり
 ○赤痢病業室感染の一例
 上田 教授

當日は生徒課室にて三共合資會社の醫療機械及藥品の陳列(昨日より引續)ありたり

(文責は記者にあり)

う、さ、生)

因に本日宮田教授は珍稀なる外科標本數種陳列して供覽せられたり

●第四回陸上運動會記事 (五月十三日)

一 委員

五月十一日の紀念日は雨天であつた、翌十二日も泣きろうふ空模様なので猶一日の延期とあつた、十三日の天候は如何？、此の日を仕損ずれば無期延期といふので茲が分目、天は果して北陸の健兒に祝福を垂れ玉ふや否やと侵に就いたが吾々の夢は圓でふい……………

十三日未明露臙一聲静か乾坤を破つたものがある之は云はずとも運動會の相圖の花火である、吾々學友は各々褥を蹴つて粟が崎に向ふた、當日は中等度の天候、村に着けば會場通路さいふ紙札が貼つてある、指さるゝ儘に未だしめつばい砂道を行く、一帯の松林があつて日露戰爭記の口繪にある様ふ砂丘が展開して来る、遙か彼方の比較的平坦な砂原に幔幕を引き廻して陣取つてあるのが運動會の會場で日章旗は朝風にひらめいてゐる、何かさく威勢がよい、潮の香がブンとする、公認下宿の汁の香よりも餘程高尙だ、

西の方日本海上を渡す波は澎湃として岸を嘯む、右の方能登半島は大猪が海を一呑にせんする姿である、帆船は波間に漂ふてゐる、水天髣髴の彼方を望むと吳も越も見えず、さすが日本海の景色は雄大である、人寄も大分ある、時間も切迫して來た、會の委員は準備に忙がしい、僕は十帖餘りの郵便紙を頂戴して椅子に凭つた、時も時、氣がきかぬ一陣の暴風は無斷で洋紙を盗んで行つた、之をして暴風と呼びずして何をか暴風といはん幸にも同僚が七八人手傳ふて呉れて辛うじて拾ひ集めた之が抑も序幕の活劇である、

午前十時半に開會、爆竹の音、煙火の響、濤聲松籟と相和して勇ましい、以下受賞の諸士の芳名を記せば、

- | | | | |
|------------|------------------|------------------|----------|
| 第一回 二丁競走 | 一着 皆川 眞 | 二着 豊田今吉郎 | 三着 小山角次郎 |
| 第二回 提灯競走 | 一着 谷 量太 | 二着 山岸勘吉 | 三着 松江良甚 |
| 第三回 スプーン競走 | 一着 安達 銷吉 | 二着 木根淵清 | 三着 山田甚太郎 |
| 第四回 四丁競走 | 一着 皆川 眞 | 二着 吉川僧棒 | 三着 西岡半三 |
| 第五回 制歩競走 | 一着 松江量甚 | 二着 太田彦八 | 三着 松田喜作 |
| 第六回 提灯競走 | 一着 谷 良太 | 二着 後藤俊一 | 三着 鶴來政雄 |
| 第七回 一分間競走 | 一着 伊藤忠一 | 二着 中村喜太郎 | 三着 中原徳彌 |
| 第八回 二人三脚競走 | 一着 (久保田太郎 松田喜作) | 二着 (金田友三郎 本 正生) | |
| 第九回 スプーン競走 | 一着 山下勝義 | 二着 牧田 泰 | 三着 柴田寅次郎 |
| 第十回 六丁競走 | 一着 和田政範 | 二着 泉 吉守 | 三着 西岡半造 |
| 第十一回 操り競走 | 一着 (長 外喜男 下川 外史) | 二着 (西村福太郎 北川 文松) | |
| 第十二回 提灯競走 | | | |

- 一着 西岡半造 二着 本村武夫 三着 谷 量太
 第十三回 二丁競走
 一着 皆川 眞 二着 西川他美男 三着 中原德彌
 第十四回 制歩競走
 一着 松田 正三 二着 山田彦次郎 三着 窪田 太作
 第十五回 四丁競走
 一着 和田政範 二着 伊藤忠一 三着 村山良平
 正午十二時休憩、晝飯、夏蜜柑の分配あり、粟ヶ崎小學校生徒來集、一時頃より綱綱を曳く、午後二時十五分開會
 第十六回 スプーン競走
 一着 森 董 二着 久保田太作 三着 山下一義
 第十七回 六丁競走
 一着 和田政範 二着 小島才鼎三 三着 皆川 眞
 四着 伊藤忠一
 第十八回 二人三脚競走
 一着(松田喜作 二着(島井環 橋本正雄 三着(佐々木武雄
 第十九回 提灯競走
 一着 谷 量太 二着 北川文松 三着 後藤俊一
 番外 粟ヶ崎小學校生徒二丁競走(第一回)
 一着 辻 宗二 二着 編澤榮一 三着 奥 政一
 四着 松林彌三松 五着 酒本榮作 六着 中島惣松
 七着 中村喜三郎
 番外 粟ヶ崎小學校生徒二丁競走(第二回)

- 一着 玉井明次郎 二着 直江五一郎 三着 丹保外吉
 四着 酒井喜太郎 五着 中本喜久次 六着 宮崎乙松
 七着 加島友治
 第二十回 職員競走(スプーン)
 一着 松原教授 二着 林 助教授
 第二十一回 小使競走(四丁)
 一着 福 富 二着 宮 三着 花川
 番外 見物人競走
 一着 相川 佐吉 二着 足立與一 三着 信濃與兵衛
 四着 玉 井
 第二十二回 各級撰手競走(六丁)
 一着 西岡半三(藥一) 二分十四秒 二着 小山角次郎(醫二)
 三着 小島才鼎三(醫一) 四着 松田喜作(醫二)
 五着 泉 吉守(醫四)
 番外 綱引二回
 三四年級合同の勝利
 箇パンの雨降る
 午後四時半閉會、山崎委員長の運動會の辭があつて萬歳を三唱し、高安校長よりの祝電朗讀、記念日のお菓子を取戴して散會、

運動會雜感

前年の運動場はふさがつた、新敷地は未だ荒蕪の有様であるので本年は會場を粟ヶ崎に移した譯だこの事、會日は例によつて十一日の所、連雨の爲めに二日延期した、我校のお誕生と雨とは因縁があるらしい、十三日は招魂祭の日、市内の賑やかさを後にしてれんげや青麥の田徑を粟ヶ崎に行く、今日は薄曇りの危かい天氣。

河北潟の灌ぎ出る大野川を渡つて粟ヶ崎村に入る會場は濱の砂原、村を守る松林に來れば遙かの向う砂道を一寸さがりに足を疲らせてやつと行き着く、この鹽梅では運動には困難だらうと想像したがその通り果して其の歎息があつた。

粟ヶ崎の砂原は廣大なものだ、此れが第九師團の訓練場だといふ、沙漠の様だ村から磯までは霞むほどだ、今日は仲々風が強い、提灯競争の諸士が思ひやられた。

觀覽者は少ふかつた金澤の市から誰も來ふかつたが村のたんちや、たーたや、あんさんも來た、おつさんも來て仲々賑やかであつた。

春にみると鬪々と高く賣り歩くあの差網は此處からも來るといふ、直段の廉いことは飛び切り、味のよいことも見懸げによらぬ旨い、この差網が如何にして捕れるかは毎常も食膳に横はつた網を見た時の感想であつたが今日は鬪らずも、否々、委員さんは計畫怠りなかつたのであらうが……この網曳を見るこゝが出来た、運動會の餘興としては上乘のもの、これほど振つた景物は空前絶後であらう、この点に於ては今回の運動會の譽さする、

浦の男は澁色の厚肌をまだ薄ら寒い海風に吹かれつゝ太繩を曳いてゐる沖には網を守る小舟が波になぶられつゝ浮きつ沈みつしてゐる、網の上るのは未だ仲々だき漁士は裕然としてゐるが見物してゐる我々は決して落ち附いてはゐられぬ磯に打ち寄する波のやうに動搖を感じる、洋々たる大海、茫々たる天涯は吾人に浩大の氣を吹き込んで自然の偉大なるこゝがヒシと身に迫る自然は常にこの妙なる興趣ある景致を吾人に展開して呉れてゐる、この自然の恵を顧みず群小に甘んじてゐるのは吾人の罪である宇宙が彌々大ふれば大ふるほど人間が彌々小さく思はれる、デモスセチスは恐瀾を叱咤して已れが舌を練えたさいふ、吾人はこの浩然の自然に嘯いて胸襟を開くべきである……と少時思ひ續けてゐると手繰られた繩が砂の上

に堆かい、喜々として足を波にさらはれんとした人もあつた、手ぐりくつて網が見え出した時倏忽一つの叫喚……「繩が切れた!!」……忽ち吾々の希望の綱も切れん計りに耳朶を打つた……漁士は躍起とあつて其を整へる、忽ち怒る自濡に躍り込んだは浦の若者、其れに續いて頭らしい老爺が後を追ふた、碎ける波の穂を肩に受けて進む、背中には灸痕が歴々として見ゆる、其がこの長い年月、この浦風に練ひられたその身軀に勞働の名譽を彫り附けたやうに見ゆる、赤禪の若者も奔走してゐる、かくして無事に網はあがつた、潑瀨としてあがつた魚は多くはなかつたが生々とした小鯛小鯖腹を太鼓にした河豚、世の中を横に通る蟹杯……それを争ふて捕ふるも壯觀であつた、地曳は終へて吾々は引きあげる、漁士は急がしく網を擴げてる、波は靜まつた磯邊を來るべき活動に洗ひ續けてゐる、北から來る風は平和なこの漁村を守つてゐるのである。

市から二里も隔つた不便な地であつたが萬端が行き届いて餘興には地曳綱があり一層の興味を添へた、番組も多くはなかつた、匆忙の裡に成り立つた第四回の運動會も豫想以上の成績を贏ち得た、廣漠たる砂丘に設けられた會場は展望して如何にも小さかつた、しかし諸士の勇氣は衝天の勢、充分の氣力を以つて行はれた、運動は圓滑に進行して加之何となくインニツヒの氣が満ちてゐた。(蒼江生記ス)

● 弓術部大會

(五月十五日)

一 委員

實にや光陰は水の流るゝが如し駭蕩たる陽春の候も梢かざりし花色と共に移り行き早や日に青葉山ほこぎすの鳴く初夏さほふりぬ
滴るばかりの木々の綠濛々として水音げに夏は活動の時なり嗚呼この時誰か鉄腕を撫して脾肉の歎を發せざるものぞ。英氣鬱勃として漲る我校の健

兒朝な夕な筋金入りの鉄腕を憂さして聲あり時は何ぞ五月十五日懺幕引きめぐらしたる道場に殺氣満ちたる健兒の今や遅しと戦を待つ今日我校の弓術部大會の當日なり

先づ開會の辭を述べられ道場に満ちたる健兒の聞の聲は天地に轟きて点取競射の激戦こそは開かれたり。各戰士の面々勇を鼓し腕を鳴らして弓を満月と引きしぼりて戦ふ様目もあてられぬ程ありき遂に桂冠は左の諸氏の頭上に落ち來れり

- 一等 近藤 二等 岩田 三等 内藤 四等 奥山
- 五等 角田 六等 奥泉 七等 延川 八等 伊藤
- 九等 山田彦 十等 小幡

次は敢取競射の激戦を開かれ當戦にて月桂冠を得られたる諸氏左の如し

- 一等 延川 二等 岩田 三等 奥山 四等 内藤
- 五等 角田 六等 奥泉 七等 野口

次に五寸的の激戦に月桂冠を得られたる諸氏左の如し

- 山田彦 伊藤 千田

次は金的を見事射て月桂冠を得られたるは藤森先生なり

次は各學校撰手競射は開かれたり各撰手は自校の名譽を双肩に擔ひ悠々として現はれ出でぬ時に満場寂々として聲ふかたづのみて唯勝負如何にと手に汗を握りて見つむるばかりなりやかと各撰手は満身に勇を鼓し秘術を盡して戦ふ様筆にも口にも及び難く遂にこの激戦に月桂冠を得たる諸氏左の如し

- 一等 楢谷(一中) 二等 岩田(醫専) 三等 奥山(醫専)
- 次は來賓の競射にてこれに月桂冠を得られたる諸氏宛の如し
- 一等 八島先生 二等 本多氏 三等 藤森先生
- 四等 關口氏 五等 村尾氏

射割の僥倖者左の如し

本多氏 八島先生 近藤

愈々當日我校諸氏等が待ちに待ちたる紅白勝負を開かれたり時移るに従ひ戦ひたけなはさかり紅軍色めき立ちて白軍の陣激聲湧く如し時しも紅軍より現はれ出たるはさる者さしられたる勇將本多氏より白軍より現はれ出たるはその名も高き老將八島先生なり各々式の如く名乗り上げて身構へたりいづれも劣らぬ勇將ふり殊に全軍勝敗の分るゝ處暗の場所ふれば各々手練の秘術を盡し一上一下電光石火一矢的中すれば歡聲天地に轟く實にや而虎深山に桃む時鐘々として風起り双龍青潭に入る時沛然として雲起るもかくぞあるべき弦音歡聲勇ましく戦今や酣ふる忽ち見る紅軍八白軍十二の得点にて遂に白軍の勝さはふりぬ勝敗は時の運勝つも破るゝも共に勇ましくそ働きける古人云ふ健全なる精神は健全なる身体に宿るさむべふるかお嗚呼我親愛ある弓術部の勇士益々勉め蒼面の徒と共に談するに足らさるなり

紅白勝負の番組左の如し(〇一本當)

- 紅軍 〇〇本多氏(來賓) 〇〇八島先生
- 〇〇藤森先生
- 〇〇關口氏(來賓)
- 〇〇影山氏(來賓)
- 〇〇村尾氏(來賓)
- 〇〇松田先生
- 〇〇宮岡氏(來賓)
- 〇〇中山(四高)
- 〇〇佐復先生
- 〇〇楢谷(一中)
- 〇〇關口(四高)
- 〇〇小原(一中)
- 〇〇蜂須賀(四高)
- 〇〇水上(郵便局)
- 〇〇酒井(四高)
- 〇〇中保(一中)
- 〇〇前田(四高)
- 〇〇山本(一中)
- 〇〇時國(一中)
- 〇〇柴野氏
- 〇〇延川

〇〇本多氏(來賓)

〇〇關口氏(來賓)

〇〇影山氏(來賓)

〇〇松田先生

〇〇中山(四高)

〇〇楢谷(一中)

〇〇小原(一中)

〇〇水上(郵便局)

〇〇中保(一中)

〇〇山本(一中)

〇〇柴野氏

○岩田 角田

○奥山 近藤

○奥泉 伊藤

○山田彦 野口

○山田甚 北村

○松井 長田

○千田 大島

○佐々木 安達

○塩村 浦

○松本 満田

○宮 〇〇内藤

紅白勝負終りて第二回点取競争を行へり優賞者左の如し

松井 大島 満田 塩村

抑々級の創立を見るに至りたるはその目的何處にあるか夫れ弓術部は柔劍術に比し微々として振はず未だその實を擧ぐる能はず多年委員一同の遺憾に絶えざる處ふり是に於てか弓術志望者を奨励せん爲め柔劍術部と等しく階級を設けなば諸氏をして一層拮据練習せしむる一助たらんをすにあり諸氏等一層勉勵あらん事を希望して止まざるふり左の程度により進級を行ふ

進級の程度

第五級。入部以來出精一通射形を覺へ心掛能き者

第四級。入部當時既に概略を習得し尙心掛能き者及二年以上引續き出精の者

第三級。三年以上引續き出精の者及び業の三つ物を可なりに心得たる者

第二級。四年間引續き出精秀逸なる者

第一級。第二級中を抜擢して之に吉田流手前之書を傳授す

(校内雜報)

今回の進級者左の如し

○近藤時男 醫科四年 内藤隆治

○角田眞一 全 奥山義盛

○延川靖 醫科三年 岩田高明

以上第二級 鳥居環 藥學科三年 大島時

以上三級 小幡一志 醫科四年 浦晴二

○満田光規 醫科三年 小池才一

○千田登 醫科一年 柳町茂家

○柴野昇 藥學科三年 佐々木武雄

○山田彦十郎 藥學科二年 山田甚太郎

○伊藤磨他雄 藥學科一年 全

以上四級 和田政範 醫科一年 原田四郎

○三輪穰 全 石川寛二

○奥泉藤次郎 全 塩村和喜男

○松本乙男 全 安達綱吉

○松井政倫 藥學科二年 藤田研二

○大西政一 藥學科一年 岡田一郎

以上五級 全

●第二回醫科三年級總會記事 (四月二十三日)

つぎ生

今日春晴れて桃花方に燦乱、一年の佳期を下してわが醫三年級の總會を開

くこきにあつた。

四月二十三日午後二時過ぎ、淺野川鉄橋の下を發した一隊は、郊外の春光を浴び滿地の風色を恣にして、宮田級長の後に續いた。ノートと机にお別れて此處半日の清遊、全く籠を出た鳥の思ふきにあらずだ。曠野を渡る微風、それが各自の胸に滿つる時に眞に氣も心も伸びるそうさ。

かくて五尺の髯男が曖昧な唱歌に興ずるもあれば、雜談に花を咲かして行くもある、かくて抑絮春麗の間を一里あまり。

粟ヶ崎では豪農木屋藤右衛門氏の庭園を參觀した、規模はさして大きくはないが、水あり橋あり築山あり、其處に配せる一木一石皆之れ誠に得難い材ちや相あ、就中番頭の説明に目を引いたのは紀州侯の家臣か坐して勝を極き切つたと云ふ大きな石であつた、其中松原田申両先生福田石川兩神經科醫員諸氏の御光來を迎へた。庭園を辭してから、大野川を下るこゝなつた。

小舟五艘に分乗、水洋々、遠山模糊、所々点在する妖桃の凡に美しきに兩岸尙配するに菜の花あり、自ら此畫中のものではふいか、折から明日は競漕會まで四高の端艇の下り上りオール音の勇ましきは、眞に吾黨の健兒の枝襪に堪へぬ處であつた。

舟中「A君落ちないようになつて居給へ」と調戲はれて「之でも泳ぎ位知つてるワイ」とAかB君に抗したのも可笑しかつた。殊に僕の舟では入敷が多かつたので立ち坐りて小舟のゆらくするに「オイオイ乃公はほんまに落ちてでも泳げぬのだ」と陸では柔道の猛者S君の本音を吐いたのも滑稽であつた。

大野へ上つてからは參々伍々、金石までの磯づたへ、上衣の端を盪風にあぶらせながら砂に靴の痕を印した。

却説、會場の位置は坐して藍碧を堪へた春波の万頃を望む處、松葉樓の別荘それである、

やがて全体の着席が終り拍子の中に住田君の開會の辭によつて會會が開かれた。

先づ宮田級長の近道と云ふ題でお話があつた所謂急がは廻れ勢田の唐橋的にある滑稽なる話を用いて其の功名を急ぐ徒の却て蹉跌することを諷せられた、次で松原先生は目前の狂瀾怒濤を捕捉し來つて大度量の要を説かれ先生在米中の心的變化の事實を語られた。次で田中先生の撻揆あり福田氏は水につきて微妙なる哲理を説き詩を引き歌を示して處生の方針須く水の如かるべしと結ばれた。

其間茶も啜り菓子も平げた。日はもう地平線上に近く蒼然たる暮色は漸く窓に迫つたので折詰が配たれ茲に愉快に今日の閉會が告げられた。

● 第十一回北陸醫會 (五月一日)

◎ 會 況

第十一回北陸醫會は去る五月一日本校内に開催せられたり。午前八時より會員參々伍々車を會場に馳せ、正午にはその集まるもの百五十餘人、午後に至り二百餘人の多数に上れり、又他に尙百餘名學生其他の傍聴者あり。午前八時四十分開會式を擧げ、九時二十分より二部に分れて會員の演説討論あり、正午休憩壹食をふし、午後一時再び開會す、午後四時半まで少憩もふさず演説を續け、午後五時閉會式を行ひ、五時半より會場を離遠からぬ臥龍山翠芳園に於て園遊會及び宴會を催し午後七時頃目出度く散會せり今左に項を分ちて其景況を詳報せん。

▲開會式 本校濟々堂に於て開かる。午前八時四十分號鈴に連れて來賓及び會員式場が集まるや、會長山崎幹氏開會の辭を述べ、且本會の年々共に發達し會員益々増加するに及び、本年は學術演説を二分科に分ちて開會するに至れる所以を叙し、次で金澤市長山森隆氏祝詞を朗讀し(知事は上京

不在の爲め出席せず、次で醫海時報社のドクトル山谷徳治郎氏亦來賓として一場の祝辭演説を認め、本會の隆盛を祝すると共に、後來本會を倍々發達せしめんには從來北陸三縣に限りし本會を擴張して新潟縣をも加ふることをし、且本會の名稱北陸醫學會を北陸醫學會と改むるの必要を述べて會の注意を喚起せり。蓋し前者は醫事集會的にして凡ての醫學的協議、改善進歩の構策討究を主とせるに反し、後者は學術研究を主とし、直接間接に我日本醫學の品位を高めんとするものにて、殊に近來各種の學會あるもの皆この主意に出て、我が北陸醫學會も時勢と共に漸次この傾向を有し、已に本日この會程を見るも純粹の醫學會と做して可あるべし。今其改稱の如何はさて置き、吾人は山谷ドクトルの進取的言辭を甚だ喜ぶものあり。終に會場掛長宮田篤郎氏は是れにて開會式を終り直ちに學術演説に移る旨を宣告し、茲に式を終りしは午前九時五分にて其間僅々二十五分ありき。

△學術演説 午前九時二十分開會、第一分科(内科外科)は病理實習室に於て、第二分科(外科、眼科、産科其他三科)は舊内科教室に於て開會す、第一分科は宮田會場掛長の挨拶の下に開會、氏は主として會場を整理し且常任座長の役を兼ね、第二分科は鬼頭會場掛長開會を宣告し且會場を整理し、高安、山崎、山田、長宗我部、庄田、前田諸氏交代座長席に就き、左の演説及び討論を行へり。

▲第一分科(午前の部)

- 一、筋萎縮病 石川 精一氏
- 二、肺炎に併發したる吐瀉症の一例 田 中正 一氏
- 三、昨年中予に寄生せし蚤の種類 今 村 文 碩氏
- 四、尿中葡萄糖を定量する簡單なる方法 同 氏
- 五、神經細胞の構造 醫學博士 松 原 三 郎氏
- 六、ソキスレット滋養糖の効果 大 月 豐氏
- 七、中樞性顔面神經麻痺 福 田 美 明氏

(校内雜報)

- 八、喘息に就て 沖 玄 仙氏
 - 九、亡國の治療 高 澤 敬 作氏
- ▲第二分科(午前の部)
- 一、腰體麻痺に就て 齊 藤 賢 德氏

- 討論 伊 藤 哲 一氏
- ドクトル 飯 森 益 太 郎氏
- 二、靴近外科的消毒の趨勢に就て 伊 藤 哲 一氏
 - 三、神經衰弱症に於ける嗅覺障害の價値 岡 忍 氏
 - 四、羊膜水腫の一例 瓜 生 保 之 氏
 - 五、食鹽のトラホーム顆粒に及ぼす作用に就て予の實驗 橫 堀 龍 男氏
 - 六、トラホーム患者を憫む 生 駒 廣 太 郎氏

- 討論 伊 藤 哲 一氏
- 橫 堀 龍 男氏
- 七、化骨性筋炎 伊 藤 哲 一氏
 - 八、紅斑性狼瘡の一例 高 桑 勇 七 郎氏
 - 九、「ホリダクテリ」の一異例に就て 鈴 木 俊 定氏
 - 正午十二時閉會、午後一時再會演説を續て 竹 多 乙 三 郎氏

▲第一分科(午後の部)

- 十、胃運動力不全に因する患者の胃自覺症及胃内容状態に就て 中 村 欣 一 郎氏
- 十一、解剖摸型に就て臨床家に臨む 石 川 喜 直氏
- 追 加 佐 々 木 達 氏
- 十二、「アンチフォルミン」「リグロイン」に依る結核菌

檢出法に就て

十三、潜伏性糖尿病論

十四、奇型性糖尿尿病の三例

討 論

佐々木 達氏

十五、痘瘡の組織的研究

十六、午前に於ける予が講演の追加

十七、膝瘡及び腸瘡の標本供覽

十八、肺結核に於ける胃官能の關係

十九、脊髄癆性精神病

二十、感染質滅却分体に就て

二十一、重砲兵第二聯隊に流行したる「バラチフス」の臨床的所見に就て

二十二、蛔虫に因する虫様突起炎

二十三、小兒粘液水腫痲呆の一例

▲第二分科(午後)の部

十、耳性腦「アブセス」に就て

十一、子癩患者九例の原因に就て、附困難なる水頭兒の頭部

十二、骨軟化症ミカストラチオン

討 論

岡本京太郎氏

十三、外陰部並に膺痕瘡の一例

十四、男子の骨軟化症に就て

追 加

十五、咽頭扁桃腺に就て並に標本供覽

討 論

玉森法 靈氏

澤崎寛 制氏

佐々木 達氏

梶川靜 夫氏

澤崎寛 制氏

今村文 碩氏

村上庄 太氏

林 篤氏

松原三 郎氏

金子治 郎氏

醫學博士 醫學博士 醫學博士

太田長 作氏

波多野 彌五郎氏

山 碯 幹氏

伊 藤 喬氏

波々伯部重 政氏

櫻林格 造氏

石橋三 也氏

鬼 頭 英氏

杉 村 廉氏

山田謙 治氏

林 喜久 松氏

藤井伊之吉氏

十六、會陰器丸に整腹術を施し効果を待たる一例

十七、新しき婦人科手術法二三に就て

十八、「フ非キシ」に就て

十九、皮膚疣狀結核の一例

二十、急性緑内障の眼球標本の供覽

二十一、近視眼の水晶体摘出の一稀例

二十二、木村式「ヘルニオトミー」に就て

▲各縣委員會 午前零時三十分各縣の委員會を開き、次回の開會地、開會時期、正副會長、及び會名を「北陸醫學會」と變更するの件を議し左の如く議決せり。

一、次回開會地 富山縣下 明年春期

二、全時期 明年春期

三、會長 杉村 廉

副會長 岡本 重保

四、會名變更の件 委員の意見は何れも賛成ありしも福井縣委員の出席者少數に付き其希望により次回までに決定するこゝろふれり

副會頭簡單に閉會の辭を述べ、茲に滯る第十一回北陸醫會を終り、一同園遊場へと趣けり。

▲園遊會、宴會、餘興 園遊會は午後五時三十分臥龍山(卯辰山)翠芳園(千歳)にて開かれたり、一發の烟花開會を報するや二百の會員、豫て園内各處に設けられたる汁粉、壽司、蕎麥、田樂、薩摩汁、麥酒、日本酒、ナイター等の模擬店に入り、思ふまゝに飲食し、此間絶えず西洋樂隊の奏樂あり、六時二十分爆竹を合圖に立食の宴を開き、接待掛長ドクトル飯森益太郎氏の挨拶あり、東西両廓の美人の周旋にて酌將に三行の頃、設けの舞台にて餘興の幕は開かれ、兩廓美人の似輪加 獅子、沙干狩等の踊及び活人畫(海水浴)ありて大に喝采を博せり、此くて一同歡を盡したる後、山田副會長の發聲にて、 兩陛下萬歳を、來賓山谷氏の發聲にて北陸醫會の萬歳を三唱して八時頃散會せり。

▲參觀 翌二日は會員隨意に金澤醫學專門學校、石川縣病院、新築監獄、日本砲實陶器會社、私立山田病院同櫻木病院、同林病院、同飯森病院、同金城病院を參觀せり。

▲器械及藥品展覽 東京三共合資會社は當日自家發賣の藥品及獨逸製の精良なる醫科器械類を出陳して來會の觀覽に供したり。

* * * * *

雜 報

● ドクトル問題の解決

駐獨大使がドクトル受驗資格證明方針を一變せしもドクトル會及各醫專校同窓會等の反對運動並に大使が文部當局の注意により方針を従前通りに復舊し、此問題は全く解決を告げ去五月十一日より開會せられし各醫學專門學校長會議に於ても此問題は現れ、各校長より珍田大使をして従前通り醫專校出身者にも證明を與へられん事を希望せしに對し、當局者も遂ひに此問題は既に解決せる旨を告げ、其證據は珍田大使より既に書面が到着し居れりさて、之を内示せり。

珍田大使の書面は左の如くして醫專校出身者にも從來通りの證明を與へ居れるあり唯だ伯林、アムステルダム、エルランゲンの三大學は特に我大學卒業の證明を要する由也。

珍田大使の右の書面は本年三月二十六日の目付にして、之が外務省の手を経て文部省に致されしは去五月五日ありしやふ。

在獨本邦留學生醫科ドクトル受驗資格

證明方に關する件

本件に關し、客年十二月廿七日付を以て俱報に及び候處、圖らずも東京帝國醫科大學に於て、審査の材料と相成たる趣き『醫海時報』に依り承知致候『醫海時報』は本使の採りたる措置に對し、號を重ねて論難し、本件は我刀圭界の一問題とありたるものとし、是に對し文部當局者の意見及び外務當局者の談あるもの我新聞雜誌等に散見致し、且つ三月九日『日本ドクトル會』は臨時總會を開き、本官の措置に對し、反對の決議を爲したる趣きに有之候。右新聞雜誌記載の事項に對し、一々辨明の要を認めず候へ共、右論難の基礎は、本官の報告に基く誤解に職由するものと相考へられ候、此點に付き、一應左に辨明致し置き候。

說者は本使に於て、證明に關する方針を一變し従前交付し來りたる證明を、今回急に交付せざることに致したるものと、解し居る様被認候處是れ全く、本使報告の意味を誤解したる結果に外ならず、從來留學生より

當國大學入學の爲め當館の證明を願出づる場合に於ては、當館は文部省指定の標準に據り、之に適合するものに對しては、單に本人が本國に於て在學せる學校の名稱及、在學期限を記載し、且つ本人が當國のギムナジウムに相當する、普通教育を受けたる旨の證明書を授與し來りたる慣例に有之候。而して、右證明書は、當に大學入學に有効なりしのみならず、尙ほ之に依り進んで、在學中ドクトル試験に應ずることを得たるを以て、特に應試資格に對し、證明書を交付する必要もふく、又之を交付したる事實もふく、然るに、晚近當國諸大學中には、ドクトル試験を志望する外國人に對し、試験規則を履行するの方針を採るものあり、其結果、前記の如き證明を以て満足せず、本國の完備せる醫科大學に於て、當國大學規程の年限間、當國大學と畧は同一の科程を修了したる者の證明書を要求したる趣を以て、某醫學專門學校出身の留學生より、既に交付し置きたる常例證明書以外に、別種の證明書、即ち本入の母校は、當國の醫科大學と同一程度の者完備せる醫科大學たる旨の證明書交付方を願出たり、然るに、此點は一昨々年十月を以て、學歴證明方に關し、伺出の際、當館の豫想せざる新事項たるを以て、右伺出に對する文部當局者の回答を以て、直ちに此種證明をも含著するものと解釋するを得ざるは勿論の義に信じ、隨て本使に於て、醫學專門學校を、醫科大學と同一程度の學校ふりと、斷定すべき根據を有せざるを以て、右の證明は、本使の職責上爲す能はず加之現に、右受験志願者の、曩に入學の際、當該大學へ提出したる、學歴證明書中には、醫學專門學校出身なることを記載し、大學の名稱を用ひざるを以て、今遽に、同人の母校を醫科大學なりと、認定證明するが如きは、前後矛盾の嫌なき能はず、旁々前信の通り、之が證明を拒絶したる次第あり、之を要するに、本件は、本使に於て、從來の證明方針を改めたるにあらずして、當國の大學中に、ドクトル試験志望者の資格検査の方針を嚴にしたるものあるが爲め、留學生よ

り、本使の職責上、政行し能はざる證明を要求し來りたる結果に外ならず候。下畧

即ち右によれば獨乙の或大學より吾大使の與へし資格証明の外に別吾大學出身者たる旨の証明を要望されたる留學生が、大使に對し其証明を願出たるに付、大使は前後矛盾の証明を與へ難く之を拒絶せしに過ぎざりしあり、而して前の公文は全く獨乙大學中には近來右の如く証明を要望するものあるに就き、將來の吾醫學留學者に注意を促したるありき。

● 古弗先生遠逝

維れ時明治四十三年五月廿八日偉人ローベルト、コッホ先生溘焉としてバーデンバーデンの寓に遠逝せらる嗚呼いたまじきか。

先生の危篤なる旨は一度報せられしも一二週にして快方に赴かれバーデンバーデンに轉地せられたりしに病氣再發して遠逝せられたるあり

尤も先生はかれてより心臓冠狀動脈の硬變ありて時々發作したるもあり先度の病氣と云へるもこの爲めに肺水腫と心囊炎とを起したるにてありし由之が今度の死因も矢張り此爲めなりしこと疑ふべからざるが如し

先生が我が邦へ來遊せられたるは一昨年六月の事にして今に至る僅かに二年を経過せるのみ音容髣髴として尙ほ耳目に在り而して先生今や乃ち亡し嗚呼悲きか。

先生の遺骸は三十一日を以てバーデンに於て茶毘に附せられ夫人は遺骨を護して伯林へ歸られたり

古弗年表

一八四三年十二月十一日ハルトツのクラウスタールに生る

一八六二年より一八六六年までゲツチンゲンの『ゲオルギア、アウグスタ』に醫學を修む

- 一八六六年ハンブルク一般病院助手をふる次でハンノーバーのランゲンハゲンに移り更にボーゼンのラクウ井ツツに轉じ醫業に従事す
- 一八七二年區醫試驗に及第しボムスト、ウオルスタイン區醫となり一八八〇年まで在職す
- 一八七六年『脾脫疽病原論』を著はす
- 一八七八年『創傷傳染病々原の研究』を公にす
- 一八八〇年獨逸帝國衛生院に入り『レギールンガス、ラート』に任ぜらる
- 一八八一年英京ロンドンに開かれたる萬國醫學會に於て細菌學の新研究方法及其成績を供覽す、就中固形培養基の如きは細菌學上に一大進歩を與へたるものあり
- 一八八二年結核菌を發見し其病原性を確定し三月二十四日生理學會に於て報告す、其功により『ゲハイムラート、レギールンガスラート』に昇任す
- 一八八三年埃及印度に虎烈刺研究の爲派遣せられ遂に虎烈刺の病原『コンマ、パチルス』を發見
- 一八八四年印度より歸る其功により議會の決議を以て賞金拾萬麻を授けらる
- 結核病原論を公にす
- 一八八五年フリードリヒ、ウヰルヘルム大學醫科大學正教授に任ぜられ新設衛生學教室主任とふる、プロフェツソルの稱號を受く
- 一八八六年研究機關『衛生及傳染病學雜誌』を創刊
- 一八八七年印度及び埃及に於ける虎烈刺研究報告文を出す
- 一八九〇年結核診斷及治療劑『ツペルクリン』を發見し第十回萬國醫學會(柏林開催)に報告す、赤鷲十字大勳章を授けらる
- 英國醫學會、柏林內科學會、ウヰルヘルム醫學會、露國聖ペートルスブルグ會等の名譽醫學會員と
- 一八九一年國立傳染病研究所新設せられ其所長とふる、フリードリヒウヰル

- ヘルム大學名譽教授に任ぜらる
- ツペルクリンに關する精細の報告を出す
- 一八九二年陸軍衛生團豫備軍醫監に昇任す
- 獨逸公衆衛生會名譽會員とふる
- 一八九三年ストツクホルム學士會院の外國會員に推舉せらる
- 一八九六年英國政府の囑託により英領阿非利加に赴き牛疫を研究し其豫防法を發見す
- 一八九七年獨逸政の命により英領阿非利加より直ちに印度に赴きベスト研究に従事す更に印度より獨領阿非利加に赴き馬疫(トリバノツム病)及牛のテキサス熱等を研究す
- 新ツペルクリンの報告を公にす
- 一八九八年阿非利加より歸る、メーメル州に於て癩病の研究に従事し其豫防法を制定す
- マラリア研究の爲め以太利に派遣せらる
- 印度及阿非利加に於ける研究報告を出す
- 一八九九年政府の命により「マラリア」研究隊に長として東阿非利加に赴き更に印度に轉じ専ら「マラリア」の豫防法を攻究す
- 佛國學士會員の外國會員に推舉せらる
- 一九〇〇年印度よりニューギニアに赴き「マラリア」の研究を了へ歸る「マラリア」研究隊成績報告書を出す
- 一九〇一年ロンドン開催萬國結核會議に於て人牛結核異種説を發表す
- 英國王立公衆衛生院の名譽會員に推舉せらる
- 一九〇二年メツツに赴き窒扶斯豫防撥滅法を攻究す
- 一九〇三年英國政府の囑託により獸疫豫防法研究の爲め英領阿非利加に赴く
- ウヰルヘルム學士會院の名譽會員に推舉せらる

一九〇四年阿非利加より歸る其成績は馬疫(トリマノゾム病)豫防法の確立あり、數回研究報告を出す
傳染病研究所長の職を辭す獨逸國王立學士會院の正員に補せらる、シエレージア國勢發展會の名譽會員とふる再獨逸政府の命により阿非利加に赴く

一九〇五年獨逸阿非利加にありてトリマノゾム病、ピロプラスマ病及蟲熱(再歸熱)等の研究を遂ぐ

一九〇六年阿非利加より歸る

ノーベル賞金を享く、獨逸外科學會及內科學會の名譽會員とふる再び阿非利加探檢の途に上る

獨逸皇帝リツテル、プール、ルメリツトに叙しエキセルレンツの稱號を賜ふ

一九〇七年阿非利加より歸る研究の結果は睡眠病の治療及豫防撲滅法の確立に在り

一九〇八年ロンドン開催睡眠病萬國會議に參列を命ぜらる

(大柏林醫師團は祝賀の爲め『コンメルス』を催し頌德牌を贈る)世界漫遊の途に上る

先生は獨逸ハルツの一寒村クラストールより起り、世界萬衆の福利に貢獻し、其恩徳の及ぶ所だに人類のみならず、牛馬鳥豕の末に及ぶ、嘗て大柏林の醫師團は先生の鴻徳を頌し

Aus der Welt im Kleinen

君は微小の世界より

Schmilt du deine Grosse

君が偉大を成就し

Und erobertest den Erkleeris,

以て全世界を略取したり

Der dankerfüllt dir den

而して全地球は充滿せる感謝を以て

Unverwelklichen Kranz,

君に凋弊することなきや

Der Unsterblichkeit reicht,

不死の綠葉環を呈す

と言へり。斯の如き者豈に伯林の醫師團のみならんや。全世界を擧げて先生の鴻恩を謝するに、表はずの辭無きに苦しむ。而して今や先生亡し。ア、悲い哉。

● 英京醫况

英國の上下を驅て狂氣の如く騒がしたる本年一月の總撰擧にて醫人の當撰したるもの十三名、内再撰の榮譽を擔ひしもの八名、黨派別にすれば自由黨に屬するもの八名、「ナシヨナリス」三名、「ユニオニスト」二名に有之、

醫界に於ては保守黨頗る振はず云ふべきに候、二月廿一日 陛下親臨開院式を擧げさせられ今や「ウエストミンスタア」の一角、自由、保守の兩黨鏑を削り夜々、龍驤虎鬪の壯觀を演じ政權争奪に熱中致居候。

例年のことには候得共本年に入りてより「インフルエンザ」の流行甚しく「オスポーン」兵學校の如き一時に患者多發し二月九日より休校するの不得已に至り候、例のチャールズ、ベレスフォード、卿の如きは早速議會にて海軍卿に質問を試み、如斯不幸の出來事を見るに至れるは同校建設の當時海軍當局者が衛生當局者の主唱を容れず費用を出し惜みたるに非るべき乎一本きめ込み申候御承知の如く同氏は昨年現役を退くの餘儀なき境遇に立到りし海軍提督にして今年「ポーツマス」軍港より擧出せられ熱心ふる現政

府反對黨の一人に有之、特に現内閣の海軍政策に向ては絶對的反對の意見を持し、目今の海軍の施設には事大小さく論難を加ふる人に候、昨年七月九日海軍豫備衛生團の必要を説き、専門家を驚かし申候、兎に角當國の人の頭は可驚程多方面にして其間口の廣きには感心致候、但し興行に至ては不幸にして未だ測量致しかれ候。

英國に於ける慈善事業の旺盛にして大規模あるは皆人の知る處、英人の世界に向て一大自慢の鼻を高くも亦無理ならぬ次第ぞ存候、這個個人主義の盛ふる國にありて此如貧富の差甚しき國に於て如此自由思想の横溢しつゝある國に於て、獨乙、佛國等大陸諸國に見るが如き所謂社會主義者を見ること少きも敢て怪むに足らざる譯ぞ存せられ候、英國々王陛下の病院基金あるものは莫大なる額にして、千九百八年(明治四十一年)倫敦市の各病院(英國の「ホスピタル」は字義の如く施療病院に御座候)に分賜せられたる金額一三五〇〇〇磅(一磅ハ約拾圓)、(明治四十二年)は、一四七〇〇〇磅に上り、昨年に於ける倫敦の施療院數は百三個にして此他恢復患者療養所及び肺癆患者收容所(何れもロンドン)に下賜せられたる金額合計四〇〇〇磅に上り候、本年三月三日右下賜金委員會を開かれ、「プリレスオフウエールズ」殿下御臨席あり本年度施療費等に關する會議あり。

右基金の外倫敦には「メトロポリタン、サンデー、ホスピタル、フランド」及び「ホスピタル、サターデー、フランド」ある基金あり年々二乃至三萬磅を施療費として提供致居候。

學校衛生問題は當國にても昨今大に注意を惹き、目下頻りに研究中の様子に御座候如此事も之を證すれば皆對衛生存競争に胚胎せる趣味ある現象の一と存せられ我等日本人にせりては好個の活教訓の一と相信し居候。

亞弗利加に領土を有する歐洲各國が睡眠病の豫防撲滅に苦心しつゝあるは非常なるものに有之、當英國殖民省が年々之が爲めに支出する金額は莫大なるものにて候、現に同省には睡眠病局あり「ドクトル、バークシヨウ」氏

主任として専ら之が研究に從事政居候、倫敦熱帶病學校、リバプール熱帶病學校よりも時々遠征を企て、獨逸、佛國の熱心は云ふも更なり葡國の如きも比較的多額の金圓を支出し之が研究を奨励致居候、千九百八年英國政府より同病研究の爲め亞弗利加に派遣せられたる有名なる「トリパノーム」學者陸軍々醫サア、デビット、プリューズ氏一先づ研究を了し過般歸英せられ候、同氏は最初遠征根據地を *mpuna* に置き主としてウヰクトリア、ナイアンザ湖沿岸に奮闘したる由にて目今當市熱帶病學者は鶴首氏の土産話を聽かんことを期待致居候。

當國にては過般「ベラグラ」研究會あるもの起り當國駐劄伊國大使を初め知名の士之を支持し差當り千磅の金を募り第一回遠征隊派遣の議を決したるに當國殖民省は直に百五十磅を支出し今や續々として釀金者あり、多分倫敦熱帶病學校講師サンホン此の遠征隊の長たることに可相成、同氏は主として砂蠅則ち *Simulidae* と同病との關係に就て研究するふらんとの噂に候。

印度並に海峽殖民地に於て脚氣猖獗を極むるに閉口しつゝある當國にては脚氣の研究に従事しつゝあるもの割合に多數にて中々熱心家も見受けられ候、小生は少くも此問題丈は日本人の手にて解決致度も希祈罷在候。

彼の有名なる *The Beit memorial fellowship for medical research* (基金二一五〇〇〇磅) は本年二月廿三日十名の碩學を「フエロー」に指名致候、此等の學者は本年三月一日より向三ヶ年間年々二五〇磅の寄贈を受くる筈に御座候我等貧乏國に育ちし人間は其遺方の大袈裟なるに眼を圓くするの外無之候。

褐色大事件と申せば當地にては有名なる事件に有之候、事の起りは一九〇三年時の *Antirivisection society* の名譽書記 *Stephen Oatridge* に對し當市「ユニヴァーシティ、カレッジ」の助教授 *W. Mr. Baylis* 氏が名譽回復の

訴訟を提起し辯論の末被告は二千磅の償金を原告に拂ふべく判決せられたり、之が爲に「アンチワイワイセクシオン」會員の躍起運動を誘發し千九百六年同會員は O'Brien 氏の支拂へる償金全部を同會にて負擔する決議を遂げ且つ廣く會員を募り禍犬の紀念を建設せんとしたりしに、同年七月時の「バツターシー」區會(倫敦市の一區)は二十一に對する三十二の大多數を以て同區所有の公地に褐色犬記念碑を建設せしむるの決議をなし、同年九月時の同區長は自ら除幕式を擧げたり、碑は花崗石にして青銅製の獵犬其上に置かる、左の碑文を刻のり。

生體解剖の苦痛を與へられ其後二ヶ月間轉々各生體解剖家の手に渡り終に千九百三年二月「ユニヴァシテイ、カレッジ」實驗室に於て無殘の最後を遂げたる褐色獵犬の紀念の爲に而て其下段には

又千九百二年中同處に於て生體解剖に附せられたる二百三十二頭の犬の紀念の爲に全英國の男女各位、如何に長く此種の罪惡が繼續せらるべき乎

アンチワイワイセクシオン會建之

同大學の學生大に憤慨し、之が奪取破壊に努めたりしも阻止せられて其目的を遂げざりき當時日本の新聞紙上載揭せられたる「ルーター」電報の所謂倫敦學生騒動あるもの則之れあり、「バツターシー」區會は爾來年々七百磅を支出し特に巡査を配置して之を保護に任じつゝありしが、今回同銅像保管を中止し之を「アンチワイワイセクシオン」之に還附するの決議をふし申候、これ頗る「クダラ」ふき事に候得共動物實驗に對する當國人思想の變化を來たしつゝある一証例と信ぜられ候。

當國一般の人士が昨今各種の方面より從來の中華主義(少し妙ふれ共)唯我獨尊主義の不利を悟りつゝあるは明かにして、獨逸が何時の間にか自己の強を變するに足る海軍力を現出し、十九世紀末より二十世紀にかけ苟も

人目を聳動するに足る科學上の發見發明は何時も他國人の手に成就せられたる等の事實は、少くとも一種の嫉情を起し次て自怖心を高めたる結果茲に始て熱烈なる奮起を惹起するに至りしものあるべしと特かに推考せられ候、我同盟國たる此大帝國の爲め最も慶祝すべき現象と存候。

然し動物試驗に對する憎惡の念は容易に下火となり、現に本年三月三日サア、フレデリックバンバレー、サア、フランシス、チャンニング、と申す連中は下院に犬を學術上の實驗に使用するとを禁止するの法律を制定せられんとを建議候候、其内容は犬を學術の實驗に供用するとを禁止するを主眼とし、若し覺睡劑を用わずして犬を學術上の實驗に使用したるものは、第一犯は罰金十磅、第二犯は五十磅又は三ヶ月の入獄、第三犯以上においては罰金一〇〇磅、又は一ヶ年以内の入獄に處せよとするにあり候、昔者犬公方犬を愛して天下を驚感せしめ、今昔、ジョンブル濫に宋襄の仁を弄して科學の進歩を阻碍せんことを、勿論此の如き建議の到底通過し得べしとは思はれざるも、由來此種の問題に對する有力なる後援者は婦人に有之、婦人の同情を失ひ婦人の感情を害ふは、社交界に於ける自己の勢力失墜を招來するものに候得ばこんふ馬鹿々々しき議に向ても眞向より鐵槌を下すが如きは餘程勇氣あるものならては演ずる能はざる藝當にて、大概は誰が反對と云ふこともなく愚圖々々の裡に葬り去るを常とする如くに候、現に昨年の議會にても醫科の屍體解剖は罪惡かり不得已ば一ヶ年五體に其數を制限すべしと建議したる者ありしも、何時の間にか消失致申候、女子と小人は養ひ難しとは東洋にのみ通用する金言と心得居候處、別段大した相場上の變動もなく其儘西洋にも通用することを發見致申候。

叙上の如き一種の思想中々に消滅せず、有爲なる醫人の研究心を沮喪せしむるこそ甚だしく、終に英國醫學の頹敗を招くに至らんとを憂ひたるあるべし、本年一月有志醫人相謀りて Research Defence Society なるものを起し、高木與壽の同級生にして常市醫學界の世話焼きとして有名なる

クトル、サンドウイズ氏の如きは最も熱心に努力せられ、昨年来大に識者の同情を博しつゝあり、現に三月四日クローマア伯爵は同會「ケンブリッヂ」支會に於て同會支持の爲め大演説を試られ候、時代の風潮にして當然の事とは云ひながら、これもまた英國の爲め最も欣賞すべき現象と存じられ候。

日英博も追々景氣付く様に御座候、シエプハアドブツシユ附近にては當分黃面短脚人種大「モテ」の體に有之候、又昨秋御來遊の際御同行せし博覽會場は今や御化粧の眞最中にて時々日本語の鼻歌も聞ゆる由に御座候（醫海時報抄）

● 韓國醫談

大韓醫院長像備陸軍軍醫監醫學博士菊池常三郎氏の談に曰く

▲設衛巡查附の醫者 暗殺の盛なる韓國では、政治權勢の外に超然として、所謂一視同仁唯だ人命救護の天職に任ずる醫師も、兇徒の前には少しの油斷もふらぬ。否か醫者が人命を救助したるがため、却て其救助せられし者の政敵より敵視せられて、白刃を以て擬せられんとするに至りては、古今東西を通じて例なき怖るべき出来事にして、如何に未開なる國民の住する韓國と雖、何人か其野蠻なる暴狀に驚かざるものがあるか。予が巽に怖るべき兇徒の毒刃に罹りて將に其生命を失はんとせし韓國總理大臣李完用を治療して、致死的重傷に不覺の最後を遂げんとせし我保護國の宰相を九死に救ひ得たるは、上韓國の 皇室を始め、下一般國民に、我日新醫學の頼るべきを悟らしめしものにて、實に韓國啓蒙を目的とする我政策の先驅たるべき此の醫學を彼の國に普及せしむるに、最良の機會を得たるものと云ふべく、吾等の大に欣喜する所であつた。然るに何ぞ圖らん、彼の自派の政治的慾望を達せんためには、あらゆる暴舉兇行を敢てして憚らざる彼

れ頼迷不逞の徒は、其政敵の將に一撃の毒刃に觸れんとせしを治療して九死に一生を得せしめし仁術者を疾視すること其政敵に異ならず、彼等は竟に此仁術者をも併せ撃滅するにあらざれば、自己の最後の目的を達し得ざるものとなし、茲に先づ予を暗殺せんとする念を固ふし、過日來度々予に書を贈つて脅迫して來た。予素よりかゝる脅迫を恐るゝものにあらず、且斯道のために斃るゝは本懐とする所なるも、かゝる頼迷不逞の徒の毒手に斃るゝは、猛獸の齒牙に斃るゝと撰む所なく、必竟大死たるを免れざれば、顧みて聊自ら警戒を加へればならぬ。當局も亦大に之を憂ひて、過日在韓の當時は素より、今回歸朝の道中及滯京中も、護衛巡查を附け、出入を警戒せしめらるゝのである。人命救助の天職を有する醫者が其天職を全ふして人の生命を救ふため、他の兇徒より脅かされて護衛巡查まで附けらるゝと云ふことは、實に古今の珍事と云はればならぬ。

▲韓國皇帝の御親任 韓國皇帝が近來益々我日新醫學を信頼せらるゝに至りしは、實に韓國上下の慶事にして、予等の甚だ喜ぶ所である。特に昨秋京城に虎列拉病の流行あり、上下官民之が豫防撲滅に汲々たりし時、宮中に於ては我日新醫學の根據によりて實施せられし最新の防疫法を採用し、且洩く走れを實地に行ふて、恐るべき惡疫の侵入を防がれしは、當に當時能く韓國宮中の靜謐を保ち得しのみならず、是れがため皇帝始め宮中一般に、我日新醫學に信頼するの念を固ふせられしは、予等の大に同國のためを賀せんとする所である。此く韓國皇帝が日新醫學を信ぜらるゝに至りし結果、予の如きも意外の御信任を得、時々召されて醫事衛生上の御下問を受くることあり。昨年十二月には特に召されて、兩陛下及多くの宮中官の面前にて、一席の衛生講話を試み、頗る 陛下の御満足を得、其後も毎月一回宮中にてかゝる衛生講話をなすことなつた。今回李完用を治療の事に就きて、上皇帝陛下の御感激糾からず、下は宮中府中大小百官に至るまで、我日新醫學の尊重すべきを十分に解し得たと信ずるのである。

▲博士の大決心 博士は韓國の醫學に對する理想及その決心を語りて曰、予は予が先輩にして學德兼備の佐藤博士の後を襲ふて大韓醫院長の椅子に座つた。一病院の院長の椅子、男子無上の榮位にあらずも雖、予が本國政府の推薦により快く此椅子に倚りしもの、又自ら思ふ所のものがあるからである。抑未開國を開發するには、醫學より良きは無い。我邦今日の文明も近くは十五年前新に我版圖に入りし臺灣の經營も、此醫學に負ふ所甚だ少くない。乃ち我國の韓國を啓發せんとするもの又先づ此醫學を利用するを以て策の得たるものとせればならぬ。予は此一片の信條を以て、自ら進むで韓國に於ける唯一の大病院及之に附屬せる醫學校經營の衝に當りたるものであるから、此一病院及一醫學校の經營のためには、此一身を獻ぐるの覺悟を持つて居る。聊嗚呼ケ聞しき申分ながら、彼の韓國の經營を以て最後の事業とせられた故伊藤公が自ら長白山の土を誓はれたる如く、予も亦半老の身を挺して韓國醫學啓發の任に當る以上は、又長白山頭の土を以て、韓國を醫學の側より開發せんとする理想のために抱つか身の殘生を以て、韓國を醫學の側より開發せんとする理想のために抱つかの覺悟を以て、昨秋此任に就いたのである。故に予は今後余が最後の事業として、且理想の現實のために努力せんとするものである。而して予が今後予の理想を現實せんがために施設せんとする所は種々あるも、予は先づ大韓醫院と之に附屬せる醫學校とを完全にし、依て以て、一は在韓の我同胞及び韓國蒼生の病を救ひ、一は後來韓國一千萬人民の健康を持し疾病を救ふの眞醫を作らんとするのである。去れば予は彼の地赴任以來未だ尙ほ半年を過ぎざるも、是れ等事業の經營に關しては十分の考案を立て、追々その實行を謀りつゝあるのである。今回の上京も亦其邊に關する用件のためである。而して現下差し當りて予の着手せる事業を擧ぐれば、先づ▲大韓醫院の改善 である。同院は數年前より佐藤博士の畫策によりて頗る見るべきものさつたが、博士も未だ其經綸を十分實行されぬ前に辭任

せられしものであるから、博士の計畫にして未だ實行せられぬものもあり、且予の新に畫策せるものも亦少くあひから、夫れ等は今後續々實行するに於るであらふ。差し當り目下着手せるは、病室の建て増しと、完全なる手術室の新築であつて、是れに要する費用六萬圓に既に支出するものとあつた。病院及醫學校の一年の經常費は、二十五萬圓であるから、巧に運用せば隨分立派な仕事も出来る筈である。其外韓國皇室から救療費として一ヶ年壹萬二千圓の内帑を下賜せられる、是れは専ら韓國貧民の救療費に當てゝある。職員制度にも少く改革を施し、從來の醫官を廢し、内科、外科、産婦人科、眼科、小兒科及耳鼻咽喉科に有力なる部長を置き、其下に助手を配置する。部長には學に思にして且十分の手腕を有し韓國に永住して同國醫學のために一身を捧ぐる覺悟ある人を當てる積りであるから、俸給は比較的多く出だして十分技倆ある人を雇ふ積である。現時外科は自分高階氏とて擔當し、内科には蓄膿新進の醫學博士森安連吉氏を聘して部長とし、産婦人科部長は醫學士藤井虎彦氏、小兒科部長は同河野衛氏である。眼科と耳鼻咽喉科の部長は尙未定であるが、是れも近々其人を得るのである。其外從來大韓醫院の醫官でありながら傍ら開業して居つた二三の人には、斷然一方にのみ從事するを命じたので、彼れ等は醫院の方を辭して開業事務をこつた。是れて公私混濁の弊を除くことが出来た。

▲附屬醫學校の擴張 附屬醫學校も追々改善擴張して、往々々々日本の醫科大學にも劣らぬものを作る考である。現在の生徒は二百人であるが次學年には七十名を募入し、又新たに藥學科を設けて、其生徒二十名を募集する積である。教授方は是れまでは譯官をして日本教授の演ずる所を翻譯して教授せし、今後は全然日本語にて教授する筈である。醫學校に必要なる圖書も新に設立し、差し當り壹萬圓にて圖書を購入する積である。死體解剖は韓國では最も困難であつたが、夫れも種々に盡力して、漸く毎月全身解剖五體病體解剖二體をふし得るともあつた。教授も又追々適任の人

を得る筈である。此くの如く醫學校の改善擴張も着々企畫せらるゝから、遠からず完全なるものとあり、立派な醫者を養成し得るとさざるであらふ。卒業生には日本の如く何か肩書が必要である云ふので「醫學進士」と稱せしむることにした。「進士」と云ふ稱號は支那では立派なものであるから、韓人も尊く思ふであらふ。醫學得業士より氣が利いた名の様であると思ふ。

▲京城に於ける日本醫。日本人四萬を有する京城には目下大凡三十人の日本の開業醫師が居る。人口四萬に對する醫師三十人は、醫師一人に對し人口一千三百三十三人であり、且是れ等の日本醫は多少とも韓人を治療するもの故、京城に於ける日本醫の數は、敢て剩多にあらざるが如きも、是れ必竟皮相の觀察で、實際に於ては、京城には一個の大なる大韓醫院ありて、其扱ふ所の平均入院百名外來四百名の患者の半は日本人であるから、此病院で治療を受くる日本人は頗る多く、爲に三十人の日本醫に對する四萬人の居留民の數は著しく減少し、従つて本日は決して少數でないに在る。否之れを日本醫の生計の困難なるを競争の劇しきとの現狀に徴すれば、實際に於て京城には已に日本醫が過剩であるらしい。故に今後内地より京城に來りて開業せんとする人は大に考ふべきことである。平凡なる手腕と一と通りの勉強とでは、成功するとは困難であると思ふ。

▲京城以外韓國に於ける日本醫。京城以外に於ても苟も日本人の數百人以上住んで居る土地には日本醫が開業して居る。就中釜山、仁川、平壤には稍多くの開業醫が居る。而して是れ等開業醫の狀況如何を見るに、素より釜山仁川等の日本人の多く且古くより住居し居る土地には、多少の成功者なきにあらざるも、其大多數に於ては遺憾ながら成功して居る者が少くないと云はればならぬ。特に輕佻なる日々醫が内地に在りて夢想する如く、數年間韓國で開業して濡手て粟的の金儲けをなすとほ到底出來ぬとである。然らば韓國の開業は全く望かまいか云ふに、是れは強ちそふてもまい。

唯一時に奇利を博せんとするが如き浮びたる考ては成功し難いが、之れに反して、事を永遠に考へ、成功を十年二十年の後に期し、永住的の計畫を以て事に當らば其成功は疑ひなきことを信ずる。即醫業の收入は少きも、其得る所を以て韓國に尙甚低廉なる土地を買ひ入れ、韓民をして是れを耕さしめ、半農半醫の思想的に經營せば、他日の成功は決して疑ひふいと信ずる。予はかかる遠大の思想を有する眞面目なる日本醫の韓國開業は甚贊する所である、之れに反して、奇利を一時に博せんとする者の開業には斷じて反對せざるを得ず云々。(醫海時報抄)

●海峽殖民地及印度地方視察談

陸軍三等軍醫正 井上圓治

予が今回の行は去る一月十九日東京を發し新嘉坡ベナン、ラングワン、カルクッタ、マドラス、チ、コリン等を経てセイロンに達し同地を三月十四日發歸朝したる往復約二ヶ月の旅行あり、今各所に於ける視察の概畧を述べんに

●海峽殖民地

この地に於ては脚氣は近年大に増加の傾向を示せり、即脚氣に因る死亡數を見るに一九〇六年には千五百人、一九〇七年には千六百人、一九〇八年には千九百人に達せり、これ同地は殖民地にして日に月に人口増加すると雖も人口増加率以上に脚氣死者増加す今同地人口對脚氣死者の割合を東京の夫に比較するに約八倍強に居り其の流行の強きを知るに足る。左ればこの地に於ける脚氣研究熱は熾なるものにしてエルリツス氏の後を襲へる衛生局長マグドウェル氏の如き就中熱心家あり又脚氣患者收容の病院は隨分大規模のものあり殊にパーシルパシヤンには特設の脚氣病院ありて其收容力は三百人の上に出づさいふ、予が此の病院を訪へる際には百四十六名の患者在りし病院は何れも

官立にして全部施療なるは勿論あり。

この地に於ては醫師を首めとして上下一般に脚氣は機械搗きの白米と密接の關係あるを信じて疑はず、而し米即ち機械搗き精米が脚氣の原因なりと断せず、其の原因は他に又あるもの存するからんを唱へ居れり、而して醫師は本病を傳染病と見做し官廳の報告統計上には傳染病中に數へあり又前述特設病院に於ける同病患者取扱状況を見るに赤痢、チフス患者と同様に最も嚴重なる消毒法を實行しつゝあり。

上述の如く上下一般に脚氣は機械搗き白米と密接する發生的關係ありと信じ居ると共に機械搗き精米以外の米殊に熟米を常食とするに於ては本病は發生せざるものとせらる、今熟米の製法を畧述すれば籾を二三日間水に漬したる後これを簡單なる鐵製器械に入れ蒸氣を通ずること十五乃至二十分然る上これを天日に曝し乾燥せしめて臼にて挽き玄米、糠穀とかし之を臼にて搗き白米、糠、糠穀の混合物をフルイに掛け、後送風器にて籾を飛ばし茲に全く米質のみを得るに至るこれ即ち熟米なり如此したる熟米は麻袋に入れ六ヶ月位の貯藏に耐ふ。

脚氣と機械搗き白米との間に密接する發病的關係ありと信ずるに至れるには之を証據立つる種々の事實あり、即ち居留民中の西洋人は本病に罹ることなきこと(罹るも極めて稀なり)兵營中土人兵の熟米食者中には本病なきも、病院(普通の病院)に於ける一ヶ年間の收容患者は七千人の上に達するが之に對する患者食を熟米食に改正せざる以前には患者中多數の脚氣併發者を見たるが之れを改正して熟米食とせしむる以來殆んど本病は其の跡を絶つに至りしこと、又監獄にては一九〇四年頃には二三百人の同病患者發生するありしに其の常食を熟米七分白米三分の混合食としたる以來患者皆無とかりしこと、其他官より食物を給する箇所在りては悉く熟米食に改正したる以來患者を出さざるに至りしこと等の臨床的事實ありて之を証明し、又前衛生局長エルリツス氏の如きは精神病

院に就て患者に一定期間は機械搗き白米を與へ一定期間は熟米食を與へ之を數回反覆して脚氣患者の發生するや否やを試験したるに幾回方法を繰返すも白米食の期間には患者多數發生するにも不拘熟米食の期間には患者出ずとの結果を得たり、これ等の事實よりして上述の如き信念益々堅固なるに至れりといふ。

上述の信念に基き同地にては一般に熟米食は脚氣を豫防するものありとせずのみならず中には脚氣に對し治療的効力ありと信ずるものもあり、こは近年熟米食改正以來其死亡%低下し來りたる事實によるものあり。右の脚氣と白米食との發生的關係論、熟米豫防説は馬來半島の人民一般に之を信じて疑はざる處なるが熟米脚氣豫防の事實及熟米の外に機械搗きにあらざる女の手搗き米も熟米と同様脚氣に罹らざること等の事實に就き之を世上に發表したるは醫師ブラツドン氏なりとす、後醫師フレイザー氏はブラツドン及一般の言ふ處に充分の信を措くも尙ほ念のためにて多數の労働者に就き以上の事實の反覆試験を行ひ其の結果右の説に賛成の意見を發表したり。又近くエルリツス氏も同様の試験を施し同様の意見を發表せり然るに其の發病的關係に就き學問的の説明を試みたる人なかりしが最近馬來半島聯合國主府ケアラ、ランブル醫學研究所に於てフレイザー氏は精密なる試験を施し始めて之に關する學術的意見を發表したり。

フレイザー氏の試験は鶏に就て行へるものにして同氏は其の試験結果により人間が食して脚氣に罹る如き穀類は凡て鶏に脚氣様疾患を起す之と反對に人間が食しても發病せざる穀類は鶏に與ふるも同様發病せず故に之に發起したる疾病は之を人間の脚氣病と同一病也と見做す亦假りに同一疾患ならずとすも差支へふし何做かなれば鶏に與へて脚氣を起す穀類は人間にも同様の疾患を發起するを以て之を試験上の反應標準とすべしを得ればかりと言ひ居れり、如斯試験は日本に於ても夙より山口

軍醫正志實博士等に依て行はれたるものあるが、フレーザー氏試験方法並に其の結果は鶏に粃米を與ふるも變化なし、器械搗き白米を與ふるに脚氣障害起る、又器械搗き白米と糠とを混ぜるものを與ふるに變化なし、尙又同種の手搗き白米を與ふるも變化なし、粃米を與へし場合亦然りといふに在りて明かに器械搗き白米によりて發病し同一種の粃より得たる米にては手搗き米、粃米、及糠を混加したる白米によりては何等障害起らざる也。

以上の如き成績によりフレーザー氏は米質中には人間並に鶏の身軀に必要なる多くの滋養成分を含有するものあるが器械搗き白米により人間及鶏に疾病を來すは搗磨され過ぎてこの滋養成分が減少若くは全然除去されたために營養障害殊に神經系統の營養障害を發起し來るに因るものありと言ひ之れが証據は器械搗き白米と雖も之を添加して與ふるときは發病せざるにあらすや粃手搗き米にて發病せざるは搗磨の不十分にして前述滋養成分が除去されず其儘に存在するを以てなりといふ、これを証明するため同氏は器械搗き白米其他を顯微鏡的に比較試験し明かに米粒外圍に著しき差異あるを確かめ得たり。尙又氏はこの地に於ける古來よりの傳説即ち占米に毒素發生したために障害を來すものありとの説に向つて試験を行ひたり即ち機械精米所に自己の助手を派して搗き立ての白米を最も迅速に送致せしめ之を鶏に與ふるに矢張り之は發病するを確かめ以て新米ありとも器械搗きの白米ならば發病することを証明せり、而して同氏の意見によれば脚氣の豫防法は至極簡單にして玄米又は搗磨不十分なる手搗き米乃至之を添加したる白米、若くは白米を食し器械搗き白米を食せざるに在り搗脚氣は米に含有する、或る滋養成分が除去されたために來る疾病あるを以て其の除去されたる成分が化學的に判明したる場合には副食物其他に於て之を補ふこととせば疾病を防ぐを得させり尙ほ又該成分の判明せる場合には器械を以て搗くも其搗磨の程度を限定せば

製せられたる白米は無害なるは勿論にしてコハ今日に於ても米質中磷酸の定量試験により略ぼ其の程度を定め得べし、即ち白米及器械白米の含有する磷酸量を比較するに白米は器械米の倍量の磷酸を有すこの事實より推して搗磨程度を限定し得るのみならず白米が脚氣豫防に効ある所以も米質外圍の除去されざるに在るを知るべしと断定し居れり。

フレーザー氏の試験法及其の成績上述の如くあるが同地の醫師は一般に其の試験方法結果は之を疑はざるも最後の説明に至りては何れも冷笑を以て迎ふる有様にして脚氣は米の外に又ある原因者ありとふし居れり。

第二 ラングウン ラングウンはビルマの主府にしてビルマを南北貫せる大河(長さ九百哩)の河口に位し海に面せる水陸共に交通の便ある土地にして人口廿九萬餘を有す土地は即河口に位し直に海を控へ加ふるに雨多きを以て高度なる卑濕の地なり三四月は夏期にして氣温攝氏の九十度上る、五六七八月は雨期にして雨量八十時に達するといふ加ふるに人口稠密なれば衛生状態佳良ならず。

ビルマは人口千九百一年に於て千五百萬を有し米の産地なり。人民の生活状態を見るに我國の夫れと大差なし殊に其の顔貌の日本人に酷似せる服装を更へなば一見判別し苦む、宗教は佛教にして常食は米、野菜、魚類等あるが其他の習慣嗜好日本と異ならず斯く國民の生活状態の日本に近き邦土に於ては脚氣の研究上に利する所多かるべしと思ひしに當時脚氣患者なく加ふるに上下等しく之が研究に頗る冷淡なるを以て大に絶望せり特殊の脚氣病院なきは勿論本病の統計亦見るべきものなし、只市醫に乞ひセララルホスピタルより提出されたる死亡報告を調査するに脚氣死亡は全死亡の二十五%あること記載されありて著しく脚氣患者多數ある如く見えしかば市醫に向ひて眞に脚氣病死あるや及正確なる數あるやを質したるに二十五%(海峽殖民地にては10%)は餘りに過大なり恐くは他病を混せるならんご答へたり、然し脚氣病の存在することは事

内(官)費 二十一人(一三、三%)
 (公)費 十五人(九、四%)

私費 百二十二(七七、三%)

私費留學生の數の、官公費留學生の數に三倍餘の多數あると、前回と同一にして、以て我朝野の醫家の私財を抛て、新智識を海外に求むるの趨勢變りふきを知るべし。

更に前回との比例を示せば左の如し。

明治四十二年
 六月未現在
 明治四十二年
 十二月未現在

留學生總數 一五七 一五八

官公費生 三六(二三、%) 三六(二二、七%)

私費生 一二(七七、%) 一二(七七、三%)

本年度に於ける官公費及び私費留學生の比例は、前半期とのに於て大差なく、就中官公費留學生の數は全く同一にして、私費留學生の數は後半期末に於て、僅に一人の増加ありしに過ぎず。

全數三十六人の官公費留學生を、其所屬に依りて分ては左の如し。

中央廳(本省) 二一

陸軍省 三 海軍省 二

内務省 一 文部省 一五

文部省に屬する十五人の所屬學校は左の如し。

東京醫科大學 三 京都醫科大學 一 福岡醫科大學 二

千葉醫專校 一 金澤醫專校 一 岡山醫專校 一

長崎醫專校 一 新潟醫專校 四 未定 一

地方廳 一五

内譯

臺灣總督府 四 關東都督府 一 樺太廳 一

京都府 一 大阪府 三 愛知縣 一
 千葉縣 一 熊本縣 一 大分縣 一
 神戸市 一

本年六月末の現状に比するに、中央廳は前回の二十二人に對する二十一人にて、一人を減じ、地方廳は前回の十四人(内二人赤十字社)に對し十五人にして一人を増せり。就中中央廳に於ては宮内省の一人を減して零となりたる外、陸海軍内務文部四省とも前回と同一にして全く異動なし。文部省所屬に於ては、東京福岡の二醫科大學及び千葉、金澤、新潟の三醫學專門學校には異動なく、京都醫科大學は一人を減して一人となり、仙臺醫專校も一人を失ひて零となり、前回に一人の留學生をも有せざりし岡山長崎の二醫專校は各一人つゝをた出すに至れり、地方廳に於ては、關東都督府、樺太廳、京都府、大阪府、愛知縣、熊本縣の留學生には全く異動なく、臺灣總督府は二人を増して四人となり、千葉大分の二縣及び神戸市は新に各一人の留學生を送り、佐賀縣は代り目として一人をも有せざるに至れり、又數年來毎回二人の留學生を出せし赤十字社も、此期に於ては同しく代り目のため一人をも有せざることなれり。

三十六人の官公費留學生の氏名、官公職及其所屬は左の如し(文部省の留學生は大抵休職となり居り、又其他の官廳所屬の人に在りても留學の爲休職となり居る人あるべきも、茲には之を記さず)。

陸軍省 陸軍二等軍醫正 醫學士 佐藤 恒 丸

陸軍三等軍醫正 同 稻葉 良 太郎

陸軍二等軍醫正 同 一川 島 慶 治

海軍省 海軍軍醫少監 同 雨宮 量 七 郎

同 醫學得業士 隈 川 基

内務省 傳染病研究所技師 同 秦 佐 八 郎

文部省 東京醫科大學教授 醫學士 磐瀬 雄 一

熊本

大學別課
開業試驗受驗者又
は出身學校不明者
醫師の資格なき者

一一	一一	一一	一一
一一	一一	一一	一一
一一	一一	一一	一一
一一	一一	一一	一一

統計を通過するに、醫科大學の出身者は從來毎回幾人かを増加し來りしに、今回は始めて三人を減じて六十六人(四一、七%)とふれり。就中東京醫科大學は五人を減じ、京都は二人を増加せり。醫學專門學校の出身者は六人を加へて七十人(四四、三%)とあり、醫科大學との比較に於て、從來久しく醫科大學出身者の多數なりし「レコード」を破りて反對に醫學專門學校の出身者は四人の多數とふれり。醫學專門學校に在りても、官立の五學校の出身者は四十六人にして、公立の三學校の出身者は二十一人、私立の二學校の出身者は僅に三人のみ。又五個の官立醫專學校と三個の公立醫專學校とに於ける留學生の増減を討ぬるに、著しく増加せしは大阪の三人にして、千葉、金澤、長崎も亦一人を加へ、増減なきは仙臺、岡山、京都及愛知にして、減ぜし所は更に之れなし。而して以上八校中留學生を絶對的多數に出せるは、相變らず千葉、岡山の二校にして、其合計數(三十二人)は實に八個の醫專學校の總數(六十七人)の略半數を占む。大阪は毎回二三人を増して終に十人の多數とあり、千葉岡山に次に至れり。相變らず少數あるは仙臺にして依然二人のみにて、他の最も少數なるもの、半にも及ばず。以上の外開業試験を受けたる者及出身學校を明にし得ざる者二十人あり。今回は海軍軍醫學校出身者は零となし、舊大學別課出身者一人を得、未だ醫師の資格を得ざる者依然一人あり。因曰日本にて醫師の資格を得ずして留學し獨逸又はシユロイツにて申學より大學に入り修業中の者は、此外尙故櫻村博士の令息一人あり、當時シユロイツ國ベルン大學に在學せらるゝと聞く(醫海時報抄)

明治政府の官費留學生

文部省が、去る十二年以後、昨四十二年末迄、醫學及藥學研究の爲め、海外に留學を命ぜし者は左の如し。(醫海時報)

- ▲明治十二年度派遣
 - △梅 錦之丞(獨逸) 三ヶ年 眼科學(故)
 - △清水 郁太郎(奧國) 三ヶ年 婦產科學(故)
 - △新藤 二郎(獨逸) 五ヶ年 醫化學
- ▲明治十三年度派遣
 - △緒方 正規(獨逸) 三ヶ年 生理及衛生
 - △小金井 良精(獨逸) 三ヶ年 解剖及組織
- ▲明治十四年度派遣
 - △高橋 順太郎(獨逸) 三ヶ年 藥物學
 - △榑 傲(獨逸) 三ヶ年 精神病學(故)
- ▲明治十五年度派遣
 - △三浦 守治(獨逸) 四ヶ年 病理及病理解剖學
- ▲明治十五年度派遣
 - △青山 胤通(獨逸) 四ヶ年 内科學
- ▲明治十六年度派遣
 - △佐藤 三吉(獨逸) 四ヶ年 外科學
- ▲明治十七年度派遣
 - △下山 順一郎(獨逸) 三ヶ年 製藥學
- ▲明治十八年度派遣
 - △片山 國嘉(奧國) 四ヶ年 法醫學
- ▲明治十八年度派遣
 - △濱田 玄達(獨逸) 三ヶ年 產婦人科學
- ▲河本重次郎(獨逸) 三ヶ年 眼科學

▲明治二十三年度派遣
△村田謙太郎(獨逸) 三ヶ年 皮膚黴毒學(故)

▲明治二十五年年度派遣
△坪井次郎(獨逸) 三ヶ年 衛生學(故)
△猪子吉人(獨逸) 三ヶ年 毒物學(故)

▲明治二十七年年度派遣
△山極勝三郎(獨逸) 二ヶ年 病理學

▲明治二十八年年度派遣
△土肥慶藏(獨逸) 二ヶ年 皮膚及黴毒學

▲明治二十九年年度派遣
△大澤岳太郎(獨逸) 三ヶ年 胎生學比較解剖學
△岡田和一郎(獨逸) 三ヶ年 耳鼻咽喉科

▲明治三十年年度派遣
△菅之芳(獨逸) 二ヶ年 內科學

▲明治三十一年度派遣
△鈴木文太郎(獨逸) 二ヶ年 解剖學

▲明治三十二年年度派遣
△山形仲藝(獨逸) 二ヶ年 外科學
△藤波鑑(獨逸) 二ヶ年 病理及病理解剖學

▲明治三十三年度派遣
△天谷千松(獨逸) 二ヶ年 生理學
△森島庫太郎(獨逸) 二ヶ年 藥物學

▲明治三十四年度派遣
△木村孝藏(獨逸) 二ヶ年 外科學

▲明治三十五年年度派遣
△田代正(獨逸) 二ヶ年 外科學

▲明治三十六年度派遣
△中西龜太郎(獨逸) 三ヶ年 內科學
△吳秀三(獨逸) 三ヶ年 精神病学

▲明治三十七年度派遣
△栗本東明(獨逸) 二ヶ年 內科學
△吾妻勝剛(獨逸) 三ヶ年 婦人科學
△三輪德寬(獨逸) 二ヶ年 外科學

▲明治三十一年度派遣

△淺山郁次郎(獨逸) 三ヶ年 眼科學

▲明治三十二年年度派遣

△高安右人(獨逸) 二ヶ年 眼科學

△石原久(米獨逸) 三ヶ年 齒科學

△千葉稔次郎(獨逸) 三ヶ年 產婦人科學

△岡本梁松(獨逸) 三ヶ年 法醫學

△桂田富士郎(獨逸) 二ヶ年 病理及病理解剖學

△筒井八百珠(獨逸) 二ヶ年 皮膚及黴毒學

△村上安藏(獨逸) 二ヶ年 眼科學

△内田守一(獨逸) 二ヶ年 小兒病學

△松浦有志太郎(獨逸) 三ヶ年 皮膚及黴毒學

△足立文太郎(獨逸) 三ヶ年 解剖學

△宮本叔(獨逸) 三ヶ年 臨床的細菌學

▲明治三十三年度派遣
△平井毓太郎(獨逸) 三ヶ年 小兒科學

▲明治三十四年度派遣
△今村新吉(獨逸) 三ヶ年 精神病学

△猪子止戈之助(獨逸) 二ヶ年 外科學

△丹羽藤吉郎(獨逸) 三ヶ年 製藥學

△和辻春次(獨逸) 三ヶ年 耳鼻咽喉科

△柏村貞一(獨逸) 二ヶ年 病理解剖學

△横手千代之助(獨逸) 三ヶ年 衛生學

▲明治三十五年年度派遣
△田代義德(獨逸) 三ヶ年 矯正外科

△後藤元之助(獨逸) 二ヶ年 生理學

▲明治三十六年度派遣
△木原岩次郎(獨逸) 三ヶ年 耳鼻咽喉科學(故)

▲明治三十五年度派遣

- ▲山 礪 幹(獨逸) 二少年 病理學
- ▲石 原 誠(獨逸) 四少年 生理學
- ▲井上善次郎(獨逸) 二少年 消化器醫化學
- ▲林 春 雄(獨逸) 二少年 藥物及毒物
- ▲小山 龍 德(獨逸) 二少年 解剖學
- ▲高 畑 挺 三(獨逸) 二少年 耳鼻咽喉科
- ▲舟岡英之助(獨逸) 二少年 生理學
- ▲金子次郎(獨逸) 二少年 解剖學
- ▲稻田 龍 吉(獨逸) 三少年 內科學
- ▲加門桂太郎(獨逸) 三少年 解剖學
- ▲横田綱太郎(獨逸) 二少年 生理學
- ▲永 井 潛(獨逸佛) 三少年 生理學
- ▲中山平次郎(獨逸佛) 三少年 病理及同解剖學
- ▲中 金 一(獨逸) 三少年 內科學
- ▲中井元吉(獨逸) 三少年 病理解剖學(故)
- ▲松岡道治(獨逸) 三少年 矯正外科學
- ▲櫻井恒次郎(獨逸) 三少年 解剖學
- ▲宮入慶之助(獨逸) 二少年 生衛學
- ▲三 島 通 良(獨逸佛) 一少年 學校衛生

▲明治三十六年度派遣

- ▲伊 東 祐 彦(獨逸) 二少年 小兒科學
- ▲速 水 猛(獨逸) 三少年 病理及解剖學
- ▲二村領次郎(獨逸) 三少年 解剖學
- ▲荻 生 錄 造(獨逸) 二少年 眼科學
- ▲高山尙平(獨逸) 二少年 婦產科學

▲明治三十七年度派遣

- ▲高山 正 雄(獨逸) 三少年 法醫學
- ▲久保猪之吉(獨逸) 三少年 耳鼻咽喉科
- ▲旭 憲 吉(獨逸) 三少年 皮膚毒學
- ▲榊 保 三郎(獨逸) 三少年 精神病學
- ▲三 宅 速(獨逸) 二少年 外科學

▲明治三十八年度派遣

- ▲石坂友太郎(獨逸) 三少年 藥物學
- ▲小川 劍 三郎(獨逸) 二少年 眼科學
- ▲敷波 重次郎(獨逸) 二少年 解剖組織學
- ▲押 田 德 郎(獨逸) 二少年 衛生及細菌學

▲明治三十九年度派遣

- ▲武 谷 廣 吉(獨逸) 三少年 內科學
- ▲栗原永之助(獨逸) 二少年 產婦人科學
- ▲櫻井三之助(獨逸) 二少年 產婦人科學
- ▲井 上 通 夫(獨逸) 四少年 解剖學
- ▲大久保 榮(獨逸) 四少年 病學解剖學
- ▲賀 屋 隆 吉(獨逸佛) 三少年 內科學

▲明治四十年度派遣

- ▲下 平 用 彩(獨逸西) 二少年 外科學及皮膚病花柳病學
- ▲島 柳 二(獨逸佛) 二少年 精神病學神經病學
- ▲盤 瀨 雄 一(獨逸) 三少年 產科學婦人科學
- ▲栗原永之助(獨逸) 二少年 同 同
- ▲荒木蒼太郎(獨逸) 二少年 精神病學神經病
- ▲布施現之助(獨逸) 二少年 解剖學
- ▲藤 田 敏 彦(獨逸) 二少年 生理學

之れ豈に病院建設の一日も忽すべからざるを知るに足らずや。然るに七日の中央衛生會は、近來にふき大討論の結果、提出者等散々に打ふやまされたる後、採決の結果は遂に無期延期となり、右延期説を主張せる地方局長等は、其の精神には無論賛成あるも、今日の現状よりして府縣に精神病院を新に建設すべしと強制するは、寧ろ不可能なり、ヨシ命令するも地方現今の經濟にては到底實行の望覺束なし。又既設私立精神病院を代用とすべしとの議は、事極めて簡單なるが、仔細に之を考ふるときは、種々ふる難問事あるべし。假令ば、設備上あり、取締上あり、或は土地關係の如きは、最も考究を要すべき必要條件たるあり。尙ほ此外代用問題に就きては利害相半すべきものありて、代用は大に調査を要すべきと共に、地方經費の重加關係には充分の注意を拂はざるべからずとて、内務省官吏側の委員は、殆んど反對せしを以て、提出者たる片山、吳、栗本等の委員諸氏の説明甚だ力めたるにも拘らず、遂に失敗に終りたるあり。因に全國の精神病患者を收容すべき病院及其收容力は如左。

府縣名	病院名	所在地	收容豫定人員
東京府	東葉鵬病院	東京市小石川區駕籠町	四四六
根岸	根岸病院	同市下谷區下根岸町	二九〇
加命堂	加命堂腦病院	南葛飾郡龜戸町	一三六
東京	東京腦病院	北豐島郡瀧野川村	一四六
戸山	戸山腦病院	東京市牛込區若松町	一四二
王子	王子精神病院	北豐島郡瀧野川村	一二五
保	保養院	同郡巢鴨村	二〇六
青山	青山病院	東京市赤坂區青山南町	一一五
新宿	新宿腦病院改	豐多摩郡代々幡村	六〇
井村	井村病院	同郡淀橋町	六七
大久保	大久保腦病院	京都市上京區河原町	五二
府立	府立療病院精神病室	通荒神口上る東櫻町	

京都 私立京都癲狂院 同市上京區南禪寺町 七二

私立岩倉病院 愛宕郡岩倉村岩倉 一〇八

私立船岡精神病院 同郡大宮村船岡 六〇

府立高等醫學校病院 大阪市北區常安町 一八

私立大阪癲狂院 同市同區本庄葉村町 一三〇

私立大阪精神病院 同市南區逢坂上ノ町 六五

私立石丸癲狂院 豐能郡熊野田村 二五

私立七山病院 泉南郡熊取村 二〇

兵庫 神戸精神病院 神戸市夢野村 五〇

須磨精神病院 武庫郡須磨村 四五

新瀉 永井慈現ノ醫院 中蒲原郡須田村鶴ノ森 二〇

千葉 縣立千葉病院 千葉郡千葉町 二四

愛知 縣立愛知病院 名古屋市中區天王崎町 六

宮城 東北腦病院 仙臺市北三番町 三〇

福井 縣立福井病院 福井市佐佳枝上町 四

石川 縣立金澤病院 金澤市 一八

廣島 武田精神病院 佐伯郡宮内村砂原 一五

山口 私立徳山病院 濃郡徳山町 一

高知 谷腦療院出張所 長岡郡五台山村汲江 一五

合計 三〇 二、五一

●學位論文 本校教授松原三郎氏と同時に醫學博士の學位を授與せられたる人々の提出論文は左の如し。

▲工藤三郎君

- 一 攝護腺病理、補遺（澱粉様小體、色素巨大細胞）（獨文）
- 一 原發性蟲様突起癌ニ就テ（獨文）

一 酸亞爾加里中性鹽類及び含水炭素ノ「トリプシン」ニ及ボス影響ニ就テ(獨文)

一 動物體內ニ於ケル酵母ノ運命ニ關スル知見補遺(獨文)

一 電氣ノ酵素ニ及ボス影響ニ就テ(獨文)

一 螢光性物質が暗所ニ於テ蛋白質毒素及ビ酵素ニ及ボス作用及ビ其歸元性ニ就テ(獨文) 合著
▲安部仲雄君

一 赤痢ノ原因ニ就テ(獨文)

一 化膿性眼球炎ノ原因ニ關スル動物試驗(獨文)

一 傳染性膿疱疹ノ原因ニ就テ(獨文)

一 痲球菌ノ簡易培養法ニ就テ(獨文)

一 ちふず患者ニ寄生スル菌ニ於ケルちふず菌ノ證明ニ就テ

一 日本浴及松下式民浴採用ニ於テ(獨文)

一 嗜痰中ニ於ケル結核桿菌ノ證明(獨文)

▲望月惺一君

一 「トリプシン」ニ由ル蛋白質分解ノ知見ニ就テ(獨文)

一 太陽粘膜ノ蛋白吸收ニ就テ(胸腺灌腸ヲ施行セル試驗ニ據ル)(獨文)

一 牛羣丸ノ自家融解ニ就テ(獨文) 共著

一 動物性臟器ノ自家融解ノ際ニ於ケル右旋乳酸ノ形成ニ就テ(獨文) 共著
▲緒方十右衛門君

一 子宮ノ年齢ニ伴フ變化ニ就テ(獨文)

一 膈内細菌ノ産褥經過ニ及ボス影響ニ就テ(獨文)

一 妊娠末期及び産褥初期ニ於ケル血液(邦文)

一 胎盤血管腫ニ就テ(邦文)

一 子宮動脈管ノ硬化及止血シ得ザル出血(獨文)

一 子宮及腔壁ニ於ケル神經節細胞ニ就テ(邦文)

一 子宮及其附屬機ノ疾病ト官能性神經病トノ關係(邦文)

一 腰部痲痺ニ於ケル脊髓神經細胞ノ變化(獨文)

一 妊娠及産褥ニ於ケル婦人ノ脚氣ニ就テ(獨文)

▲松原三郎君

一 變態性精神病ノ本態(獨文及英文)

▲島柳二君

一 兔ノ腦ニ於ケル一種畸形腫(獨文)

一 脊側迷走神經核ノ比較解剖學(獨文)

一 家兔ノ神經中樞ニ及ボス「アドレナリン」ノ作用ニ就テノ動物試驗(獨文)

一 神經中樞ニ關聯スル「アドレナリン」點眼ノ瞳孔散大ニ就テ(獨文)

因に諸氏の簡歴左の如し

▲望月博士 氏は明治二十五年東京醫科大學を出て、ベルツ教授の助手として内科學を專攻し、後ち大津病院長に聘せられ、更に京都醫專教諭に轉じ、在職の儘、獨國に留學すること二年、先に博士島村校長が病を以て職を辭せらるゝや、推されてその後を襲へり、洛西の地、笠原、中西二博士と共に内科の「オーソリチー」たり

▲工藤博士 氏は明治三十年の東大出身也、同三十二年岐阜病院に赴任し、その翌年二月京都日吉病院に轉じ、同四月京都府立醫學專門學校教諭さるり今日に至る、其間明治三十九年五月より二ヶ年間小兒科及び内科學研究の爲めに、獨に國留學を命ぜられ、民賢及び伯林に於て、具さに斯學の蘊奥を究められたり

▲安倍博士 京大出身の英才にして、夙に松下博士指導の下に細菌學及び衛生學を專攻し、等身の業蹟一として斯學の進歩に資せざるあらず

▲緒方博士 去る明治三十五年東京醫科大學に業を卒へて、産婦人科教室

に助手たること二年鹿兒島市立病院に赴任し、池田博士、山崎學士等と九州の斯學界にて馳せしが、後ち大阪府立高等醫學校教授及び同病院産婦人科部長に轉じ、去る明治四十年擇ばれて獨國に留學し、昨四十二年歸朝せらる、その頭腦の明晰ふるは夙に僚友の知る所なり

▲松原博士 明治三十一年金澤醫專校を出て、翌年直に東京醫科大學に遊び、始め病理學選科に入り、その年九月更に精神病選科に轉じ、間もなく助手となり、某鴨病院に研究すること五少年、三十六年十月職を罷め十二月渡來して五少年間、米國精神病學の泰斗マイヤー氏に就きて斯學を研究し、四十一年八月歐洲に行き、獨佛英その他の斯學を觀察し、十二月歸朝し、母校の聘に應じて教鞭を執りつゝあり

▲島博士 明治三十二年に帝大出身也、卒業後青山内科に助手たること二年、仙臺醫學專門學校に赴任し、去る四十年獨國に官遊し、内科及び神經病學につきて研讀し、昨秋九月歸朝せられしが、氏は不幸にも留學中病を獲て今猶ほ任地に趣かず、當地に留まり佐藤外科に於て病床に横らる、吾人はこの篤學の士が速かに全癒して、斯學に盡くされんことを切禱す

●松原教授學位受領

本校教授松原三郎氏曩に論文を提出して學位を請求せられしが、四月二十日文部大臣より醫學博士の學位を授與せられたりその學位記及び提出論文は左の如し

學位記

石川縣士族

松原三郎

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入り定期ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ

(雜報)

明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク、

●松原博士學位請求論文

本校教授松原三郎氏四月廿日醫學博士の學位を授與せられしは既に世人の知る所あり、教授は本校醫學部時代の卒業にして爾后東京醫科大學に助手となり、病理學及精神病學を研め、颯然海を涉りて北米の大陸を横ぎり紐育州立精神病院研究所に止まる事多年、斯學の蘊奧を究め其間拾有餘の業績を遂げ給ひ歸途西歐の學府を歴訪せられ、善く斯界の大斗と面語し、其學識と業績を探り、昨年正月歸郷せられ、直に母校の爲め教鞭を取りて精神病、神經病、法醫學の講坐を兼擔せられ、日々東西斯學の精華を説き、多年造詣の學識を披瀝して學生を薰陶し給ふ、傍ら金澤病院神經科部長として可憐の患者に接して慈母の如く、朝夕書に親むの餘暇、十全會雜誌部々長として本誌編纂の業に従ひ給ふ、聞くならく、先生在學中始めて級會ふるものを組織し漸次他級に及ぼじ、次で一團とふりて茲に十全會は生れ出でぬ、當時の機關雜誌は、先生方の植字によりて發行せられ、十有歳の齡を重ねて本日之十全會誌とばふりしより、嗚呼、誰か鐵腸氏の業績に服し、教授の學風を偲び、博士の德風を欣仰せざらむや。

先生の提出し給ひ學位請求論文は、鬱憂病の本態なる約一千餘ページの獨英文の長篇にして、精神病理學の基礎に一大光明と新工を加へしもの、斯界の大斗チヘーン、クレペリン諸氏の說をして顔色ふからしむるの一筋あり、世の所謂論文と異なるは論を待たず、今其要旨を左に掲げ他日機を得て全篇を紹介し得るの榮を得む哉

學位請求論文審査要旨 (官報第八〇四號)

●鬱憂性精神病ノ本態 (獨文及英文)

醫學博士 松原三郎

著者ハ、紐育州立精神病院研究所ニ於テ精神病ノ臨床的及ヒ病理解剖的研
究ニ從事セシコト四年、其間ニ經驗シタル病床的材料ヨリ鬱憂性精神病ニ
關スル此論著ヲ公ニシタリ

著者ハ、先ツ鬱憂病ノ意義及ヒ歴史ヲ述ヘ、次ニ歐米諸先輩ノ此病ニ關ス
ル定義ヲ列舉シ、然ル後自説ニ移リ鬱憂病ノ大體ニ於テ原本症ト別症トニ
區別シ、原本症中ニ自覺的及ヒ他覺的ノ制止ノ狀態自覺的及ヒ他覺的興奮ノ
狀態自覺的及ヒ他覺的ノ障礙ナキ狀態自覺的制止アリテ他覺的制止ナキ狀
態ヲ區別シ、其他ニ猶ホ體質的鬱憂狀態老人性鬱憂狀態體質ノ低格ナル鬱
憂狀態心機代償障礙アル鬱憂狀態神經病アル鬱憂狀態ヲ別種トシテ舉ケタ
ルカ右自覺的制止狀態トハ患者カ自身ノ聯想等精神作用ノ制止ヲ感知スル
ヲ云ヒ、他覺的制止狀態トハ患者カ自身ノ之ヲ感知セザルモ、其言語行為ニ
ヨリテ他覺的ニ是等制止ヲ認知スヘキモノヲ云フニテ右ノ如ク其一方又ハ
兩方ノ障礙ナキ症モアルニヨリテ、著者ハ鬱憂病ノ本態ヲ認ムルニハ重キ
ヲ精神作用ノ制止ニ置カスシテ、鬱憂ヲ以テ此病ノ原發性ナル主要徵候ト
スヘシト論シタリ

概今精神病學者ハ通例鬱憂狀態ニ躁鬱病ノ鬱憂狀態(即チ前記自覺的及ヒ
他覺的制止ノ狀態)ト、クレペリン氏ノ稱スル退收期鬱憂症(即チ前記自
覺的及ヒ他覺的興奮ノ狀態)トノ二種ヲ區別スレト、著者ハ此二種ヲクレ
ペリンノ考フルヨリモ近似シタルモノトシテ、之ヲ別病トシ分離スルコト
ヲ非認シタリ、乃チ著者ハ彼ノ退收期鬱憂病カクレペリンノ從來ノ説ノ如
ク退收期ニ於テ初メテ又唯ダ一回發スルニアラサル場合モ屢アルヲ實驗シ

テ、之ヲ退收期鬱憂病ト稱スルヲ不可トナシ加之又退收期鬱憂者カ其前ニ
數回ノ輕キ鬱憂發作ニ罹リタルコトアルモ稀ナラス、又是ヨリハ稀ナルモ
退收期鬱憂病ノ特徵ナル發作カ同シ人ニ二回起リタルコトモアリ、又此症
ニシテ若年ノ者ニ發シタル數例ヲ實驗シ、或ハ此症カ躁鬱病ノ鬱憂狀態又
ハ發揚狀態ト混一スル所謂躁鬱混合狀態ヲ實驗シ又一例ニ於テハ一發作カ
所謂退收期鬱憂狀態ニ同シク、一發作カ躁鬱病ノ抑鬱狀態ナルヲ見テ、各
其等ノ實例ヲ引證シテ彼ノ前記二狀態カクレペリンノ從來ノ説ノ如ク全ク
別種ノモノニアラス、猶ホ近ク互ニ相ヒ關涉アルモノナリト論シタルカ、
猶ホ又々近頃クレペリンカドライフイスノ説ヲ根據トシテ此二狀態ヲ全ク
同一視スルヲモ非認シ其理由トシテ兩者ノ標準的病例ニ於テ其病狀心理的
ニ甚々相異スルコトヲ稱シタリ、即チドライフイスハ退收期鬱憂病ヲ混合
狀態トシ、其病者ノ運動不安ヲ鬱病ノ精神運動的興奮症狀ト同視スレトモ、
是ハ明ニ苦悶ヲ生スル不安激越ニシテ鬱病ノ不安トハ心理的ニ相異スト認
メタリ

著者ハ、鬱憂病ニシテ其全經過中自覺的ニモ他覺的ニモ制止狀態モ興奮症
狀モナキモノヲ單一性鬱病ト稱シ、其方同一ノ人ニ鬱病ト交代シ來リシ一
例ヲモ見サリシ等ノ理由ニモヨリテ、之ヲ一箇ノ原本症ト認メントシ、又
之ニ同シク自覺的制止症狀ハアリテ他覺的ニハ制止又ハ興奮ノ症狀ナキモ
ノモ、鬱病ト交代シテ同一ノ人ニ來リタルヲ見シコトナシト云ヒテ、之
ヲモ一箇ノ原本症ト認メタリ、右單一性鬱病ハ猶ホ著者ニヨリテ三種ニ別
タレ、其一ハ單一性鬱病、其二ハ偏執性鬱病、其三ハ幻覺性鬱病ナリ、著
者ハ、此終ノ二者ニ於テ一時的ニ幻覺又ハ妄想アルモノヲ認メスシテ、妄
想又ハ幻覺カ鬱憂ト同ク之ト並行シテ主要ニシテ、且ツ持長的症狀タルモ
ノヲ認メ是等ノ病症ニ就キテ各其實驗例一箇乃至數箇ヲ列舉シタリ
所謂別種ノ中ニ就キテ、著者ハ特ニ體質低格ナル鬱憂狀態及ヒ心機代償障
礙ノアル鬱憂狀態ニ心ヲ用ヒ、甲ハ早發性癡呆類似ノ症狀ヲ兼テ、種々ノ

拒絶症、絶食時々ノ奇異ナル妄想アリテ、後ニハ治癒スルモノニシテ、
屢々早發性癡呆ノ定期發作症又タ治癒ト誤認サル、コトアリテ、即チ病ノ
盛ナルトキハ早發性癡呆トセラレ、治癒後ニ於テハ低格著名ナルトキハ早
發性癡呆ノ殘缺性治癒ト認メラレ、低格輕微ナルトキハ其金治ト認メラル
ヘシ、乙ハ稀有ノ症ナルモ鬱憂狀態ノ發來退散共ニ心藏代償機能ノ障礙ニ
一致スルモノニシテ單ニ兩症ノ合併スルモノヲ謂フニアラス、指南力記憶
意識ハ正常ニシテ、苦悶アリ妄想アリ、幻覺アルモアリテ、症狀ハ種々一
定セストハ著者ノ記載ナリ
右ノ諸項ハ一々皆ナ先輩ノ意見ヲ引證批評シテ自己ノ意見ヲ陳述シ、其基
礎タルヘキ病例ヲ列舉シタリ

●松原博士學位授與紀念祝賀會

(一) はしがき

蛟龍安ぞ常に池中のものからんや。管くは風蕭々として易水寒く、男子一
たび去つて復た還らずと號叫し去り、渾身既に茫游たる學海の人とあり、
敢爲の氣、事業の志、奮闘の勇遂に蕞爾たる孤島以て其素志を展ふるに足
らず、遙に太平洋の波を蹴つて、晨には天涯の曙光に、夕には舷頭の月影
に、行路は遠く青雲の志を乗せて走れば、時はれ黄金、精力主義の本場、
自由奮闘の風いと清き北米の地に先づ馥郁たる深紅の花を開きめ呼壯ふら
ずや、世界に完美を誇れるアメリカンカンパシコロギーも今や東亞に其運命を
移推すべき時機は近づきぬ。
あゝ爾、偉大なる星よ、爾寔に照すべきもの無かりせば、爾の福祉何かあ
らん……………とほこれツアラトウストラの序言にあらずや。然り、然り、
現代の智識、世界の學園、寔爾はこの花によりて更に潤色せられずんば、
爾の福祉また何處にかある。

男子一たび世に出づるや、凡そ何等かの瓜痕を印せざる可からず、しかも
半生の推敲奮闘いまだ博士の如きは空に見る所にして、手を下すや則ちミ
クロトームとペンあり、口を開くや則ち深遠なる學理と、崇麗なる人格あ
り、しかも雄大奔放の奇、卓犖絶倫の妙、洵に一世を空にするものありて
存す。

思へば紀念多き Wards Island 島の磯波や、マシントン山頂の星影や、太
西洋上の月影や、獨逸佛英の野の花や……………今も尙ほこの高潔なる偉人
の香に酔ふて、幽遠餘情長へにその跡を語るなるべし。

天ふる哉、時ふる哉、富嶽の雪、湘南の波、故郷の山遂にこの花を歓迎し
て迫り、授くるに精神病学を解釋すべき鍵を以てし、今はた冠するに醫學
博士の榮號を以てす。豈慶賀の至りからずや。近時世相は滔々として、春
花秋草徒らに開落し、虚勢陋々空しく歴史の尊重を害するの徒多き時、
曩には鏘々たる金子博士、今また齶々たる松原博士ありて、蒼古雄健、精華
絢爛、共に濁りたる卯月の水に点々として、薄黄の襪を載せて走るの觀あ
り。豈壯快の至りからずや。

さらば、前途有爲の日本醫學のため、我が勇敢なる母校のため、この
新進氣鋭の博士の爲め、盈ち溢れんとするこの盃を祝福せよ、溢れたる水
黄金とふりて其中より流れ、到る處に歡喜の面影を運ばんか。

祝賀會發起人名列

金澤醫學專門學校學生團、同期卒業生、

(以下イロハ順)

- 石川喜直 飯森益太郎 生駒廣太郎 井村勇作
- 石川精一 林常雄 八田智証 林篤
- 洞庭清次郎 脇坂慶造 鷺山謙吉 和久田勝之
- 金子治郎 加藤靜雄 加藤慶三 河合明

川島 俊	米村 吉太郎	由雄 元太郎	田中 一次郎
田中正一	高岡 榮	高口 保太郎	竹内 養安
津川 垣	辻本 辰之助	津田 三郎	塚本 政治
黒田 力男	阿本 京太郎	山 崎 幹	山根 松太
山田 義忠	山田 孝太郎	山本 兵三郎	上田 計二
松田 彌三次郎	前田 捨次郎	藤井 亥之助	深美 貞之助
福田 美明	古丸 藤三郎	越野 義三郎	阿部 莊二
佐藤 文太郎	鬼頭 英	三木 榮末	三木 三郎
宮田 篤郎	水井 時方	清水 松平	本岡 三千治
瀬尾 順四郎	鈴木 定友		

發起人會記事

(四月廿九日午後七時)

一片の回章集ひ來る發起人、學校側、軍人側、開業醫側、病院側、郡市の有志、學生代表者無慮六十名餘の多數、所は本校の病理教室、期せずして話柄は松原博士の身上と業蹟とに集中し、各自博士の光榮を祝するご同時に母校の譽を稱え知らずして肩身の擴がる感堂に溢れ、議せざるに、祝賀の一大計劃は成立しぬ、憶ふに是れ博士の徳風能く人を化せしに外あらざるあり、然れども熱情内に溢れては各自其最上を望み、赤誠胸に湧きては各自會の完全を希ふ、斯くてはと、年長者津川垣氏を議長の下に左の諸項を滿場異議なく可決し散會せしは時將に午後十一時なりき

協議事項

- 一、本校各教授方にも發起人を依頼する事
- 一、希望者は何人と雖も發起人に加はせしむる事
- 一、會期、五月八日午後三時開會
- 一、會場、兼六公園内に於て(晴雨に係らず)
- 一、會費、會員壹圓五拾錢、學生、八拾錢ツ、

一、方法。式、祝辭、紀念品贈呈、等

餘興。爆竹、樂隊、角力、擊劍、柔道、摸擬店、提灯行列等

一、博士の肖像を學校に寄附すること

一、以上の各項を完成する爲め委員を置き金澤病院各部主席醫員及學生諸氏に托し市内にては米村吉太郎氏、岡本京太郎氏、八田智証氏に委任す。

(二) 式と餘興

新緑人の袂に薫する五月八日！
連日の降雨霏々としてさみだれ、櫻を送りたる人々は爰暫し雨に晩春の餘情を偲びしも此日午下、陰雲俄に霽れて山紫水明、若葉のそよぎ、小川のせらぎ、一として希望と祝福とを語らざるはふし。會場なる兼六園の一角には、今や日章旗とA.Mの幕は連々として凱風に波打ち、無数の万国旗は翻々としてピラツミツト形に流れ、嚙曉たる樂隊の奏する浮き立つ調子は天來の聲に似て、陸續として參集するフロツクコト、バナマ帽、宛もバラグイスに遊べるが如く、歩杖ゆるやかに場内を逍遙せり。式場の正門をすれば左右に庶務掛ありて委員諸君頻りに來會者の斡旋に忙しく、來會者は此處にてフロツクに名票を吊られ悠々として場内に入る。場の中央には稍高く演壇を設く、其正面即ち場の最も奥には本日の主賓松原博士、母堂及び令夫人の席を設け、更にその席に纏り、一個の壇を設け卓を飾す、即ち博士は此處にて祝賀の辭を受けらるゝあり。その壇の前には博士が授與せられたる學位証書を扇額として掲げ燦然として日光に反射す。
場を出ずれば、十數軒の摸擬店、青葉がくれに散在し清涼閑雅の趣を添ふ、來會者は三々伍々若葉の影を縫ふて集まり、池畔の風光を眺めて會場に急ぐもの尙引きもきらず、既に定刻前に於て無慮一千を數ふるに至れり。
これより曩き、質朴なる博士は母堂及び令夫人同伴、徒歩にて入場せらる

いや、拍手歡迎の聲四面より起りて急駭の如く、池中の鯉魚も跳りて本日の盛典を壽ぶくが如し。午後三時定刻を告ぐるや、轟然たる爆竹と共に祝賀の幕は開かれ、平和の天使はしづ／＼と盛装して進行し來りぬ。……この間愉快なる奏樂は、啾噥として流るゝが如し。

開會の辭 委員長 金子博士

本日の快晴これを松原日和とも云ふべし、不肯余輩の微衷より出でたる本會の趣旨を諒察して、爰に臨場せられたる松原君及び母堂、令夫人に對し深く感謝の意を表す。尙ほ遠路貴重なる時間を顧みず參集せられたる滿場の諸君に對し熱誠なる謝意と満足を表す。

そも／＼松原君の頭腦の明晰なる、精力の偉大なる人格の崇高なる、敢て爰に喋々するを要せず、君が今日提出せし論文は實に堂々たるものにて、「メラノコリ」の本態に就て英獨兩文より成り、實に千有餘ページに亘るものあり、而して自ら「タイプライター」を取つて作成せられしふりさ云ふに至つては余輩其精力の偉大なるに一驚せざるを得ず、思ふに今日の榮譽はこれ君が過去十年間に於ける異数の刻苦研鑽の結晶に外ならずして何ぞ、今や君が身体は君一人のものならずして實に國家のものたり、希くは益々自重せられんことを。終に本日の設備方端不行届の点多しと雖も願はくは余輩の切實なる赤心を酌んで、和氣飄々の内に充分の歡を盡されんことを望む。

祝詞 教授總代 山崎教授

本日の晴明を卜し、新緑滴らんとする風光明眉ふる兼六園に於て、松原博士學位授與祝賀の盛典を舉ぐるに當り、余も亦其列に加はり一片の祝詞を述ぶる光榮を有す。願れば君が才氣、學識の豊富なる、既に學生時代より卓然として群を抜き、その非凡、有爲の精力實に超然として、頭

角を現したるは、今尙ほ余の記憶に存する所あり。爾來君は東京帝國大學に、巢鴨病院に研讀致々夙にその異彩を放ち、進んで米、歐に遊び益々其本領を發揮し、華を採り精を修め造詣する所のものに深大あり。余は今にして君が名譽ある學位を受けらるゝ、寧ろ其の日の遅きを信ずるもの也。君いまだ壯齡、前途幾多の春秋に富む、希くは益々健在なれ、一言蕪詞を述べて萬腔の祝意を表す。

祝辭

少にして神童の稱を小學に馳せ長して中學に特待生たり醫學部に入るに及び學才愈煥發し最優等の成績を以て業を卒へ更に東京大學助手として傑秀の名を揚ぐ而も蕙蕭たる孤島の斯學は以て君が研鑽の功を補け君が大志の一端を充すに足らず蹶然海を涉りて北米に赴き世界第一の精神病院研究所に入りて思の儘に斯學の蘊奥を究むる事多年一朝業成りて歸るや直に論文を提出して茲に醫學博士の榮位を受くまた所以なきにあらざるあり。

君は學の人也徳の人也その徳行と篤學とは近世稀に見るの處常に奮闘主義を以て勵精事に當り學で撓まず教へて倦まず謹厚誠直權勢に阿らず風俗に傲らず入ては孝養至らざるなく出ては則ち緝睦及ぼざるなく之を貫くに凜乎犯すへからざる氣節と清高比ふき品性とを以てすその今日ある素より其處也と謂ふべし

君が學位請求論文や鬱憂病の本態なる長篇ありと雖も多年刻苦修得せし研究業績や啻に三五のみからんや實に十有一の多きに及べり而して唯其一を以て一躍最高學位を贏ち得たる彼の屑々著流々學問と情實に援因してわづかに之を受くるさ全日の談にあらざるあり鑿には金子博士兼狀縁及隄弓之人工形成さる一題を呈出して之を得給へしに今復君之を再びす吾等は母校出身者か前後揃ひも揃ふて深遠なる學識と明晰なる頭腦を以

て堅實なる研究の歩武を進め卓越なる不易の見解を試み爰に榮として披くべからざる一大鏡案を下したる這般有益なる業績を學界に貢獻せられしを大に喜ぶものあり、

於戲君か篤學や金子博士に似たり君か德行や故小川教授に似たり君か半面には小川教授の徳風を偲ふべく君か半面には金子博士の學風を偲ふべし學徳兼ね備ふ君の如き蓋し兩師を打して一丸とみせしもの吾等の慕ふ處此に在り吾等の尊ぶ處實に此に在り。

されば君や年尙壯將來の造稽と大成や蓋し測り知るべからざるものあらん若し夫れ半千の學生か親しく薰陶を受くる幸福は云はずもあれ君か爲に一段の光彩と千鈞の重きを爲したる母校の發展や特に其手腕に待つもの頗る多からんを信ず吾等は今次の榮譽を祝すると共に君か多望なる前途に向て更に第二第三の盛大なる祝賀會の開催せられん事を庶幾ふ聊々衆の薦むるに任かせ一千の卒業生團に代りて謹て祝す。

金澤醫學專門學校卒業生團

總代 八田 智 證

明治四十三年五月八日

祝 辭

櫻去つて新綠將に滴らんとする時、爰に醫學博士松原三郎氏學位授與祝賀の盛典を擧げらる、君は實に我郡出身にして夙に篤學の聞え高し、今や名譽ある學位を授與せらる、蓋し君が平素の推敲奮勉の結果たらざるべからず、希くは前途益々健康を保持せられ、斯學の爲め大に貢獻せられんを祈る、聊か燕祥を呈して祝辭とす。

石川縣河北郡有志總代

明治四十三年五月八日

津 田 三 郎

祝 辭

我敬慕スル松原先生ニハ、纒ニ在米セラル、コト數閏年精意親シク全宇暇々ノ醫海ヲ掬シ錦囊深ク玉昆ヲ藏メ給ヒ歸朝早々其積蓄洪業ヲ披歷シテ博士ノ榮冠ヲ享ケ玉ヒ母校爲メニ一段ノ輝彩ヲ添ヘ北野新タニ一團ノ烟星ヲ加フ、憶フニ、先生職ヲ母校ニ奉ジ玉ヒ天賦ノ靈オト積年ノ研鑽ヲ以テ扶掖垂教ニ從ヒ給ヒテ滿一歳而シテ吾人ハ正ニ先生ガ第一赤兒ナリ今茲ニ先生ガ榮譽ニ逢遇シ衷心ノ欣悅緘黙ヲ許サズ新綠清爽ノ陰幽禽囀々ノ間賀會ヲ啓キ祝意ヲ表彰セントス悲イ哉黃嘴ノ啞辯点々草子成サスト雖モ苟モ吾人が胸裡ニ横溢セル情調ノ波動必ズヤ先生ガ胸琴ニ觸レテ甘受ノ一笑ヲ得ンコト吾人ノ信シテ疑ハサル所ナリ、謹テ祝辭ヲ呈ス

門下生總代

明治四十三年五月八日

松 村 喜 一 郎

祝 辭

綠翠滴タラントスルノ候 恩師松原教授閣下ノ學位拜領ヲ祝賀スルノ光榮ヲ有ス 閣下先ニ本校ヲ出デ後東都ニ北米ニ不屈不撓ノ精氣ト明晰ノ頭腦トヲ以テ專心醫學ヲ研究セラル、一多年歸朝後任セラレテ本校教授トナラセラル、爾後接スル人ヲシテ其ノ學深遠其ノ徳温厚至誠實ニ醫學者ノ典型タルヲ叫バシメタリ、殊ニ生等子第後輩トシテ其感ヲ深クシタリシヲ論テ待タザルナリ、今哉閣下一大論文ヲ以テ醫學博士ヲ授與セラル是レ本ヨリ國家ガ國士ヲ遇スルノ道ニシテ敢テ怪ムニ足ラズト云フ者アランモ然モ斯ノ學斯ノ徳及其頭腦ニ非ズンバ何チ以テカ此度ノ榮譽ヲ獲得スルチ得ンヤ、生等喜悅萬感胸ニ迫リテ爲ス所チ知ラズ唯萬腔ノ熱誠ヲ以テ祝意ヲ表シ併而閣下ノ萬歳ヲ祈ルノミ願ハクハ其ノ中情ヲ察セラレシトナ

明治四十三年五月八日

金澤醫學專門學校醫學科生徒總代

矢吹清

紀念品目錄贈呈

委員田中一次郎氏恭シク紀念品目錄一封ヲ博士ニ捧ゲテ着席セララル

目錄

一、紀念品

以上

右學位授與祝賀紀念トシテ贈呈候也

明治四十三年五月八日

松原博士祝賀會

松原三郎殿

祝電披露

博士ノ誦及ビ先輩知ヨリノ祝電朝來夥シク到着シ其數三十有餘ニ達シメ
委員福田美明氏一々是レテ披露セリ今左ニ其姓名ヲ列記セン

- 吳 秀三 片山國嘉 木村孝藏 鈴木文太郎
- 松島不二 宮永學而 飯森益太郎 高橋常作
- 國分金城 高 伊三郎 新谷成三郎 竹多乙三郎
- 敷波重次郎 野村亮吉 門脇眞枝 渡邊宗一郎
- 天野彦次 其他十餘通

博士の答辭

百雷の如き歡呼、急霰の如き拍手、天地の神も驚きて耳や籍さむ、今しも
徐々主賓席を離れ給ひし博士、歩を運びて中央式場の上り立ち、謙遜の

態度、眞卒の言辭以て會員に會釋し、水打ちたらむ如き會表に向ひ謝辭を述べて曰く

諸君よ、諸君は不肖一介の書生の爲め本日を下し、斯くも盛大なる祝賀の榮典を舉行されしを感謝す、殊に御繁忙中御臨場の上、不肖始め家族を御招待被降、其上結構なる紀念品を迄惠まれしに至ては感謝するに辭なく唯々長く我身の榮譽として、松原一家の譽として子々孫々に迄語り傳へて末永く保存せむとす、謝さむとして辭なく、感極まりて口意に沿はざるを如何せむ、不肖一篇の論文以て、學位を授與せられしは是全く、諸先生及び諸君の御庇護に基づきしものにして深く感謝する所あり、實に不肖の如きは學問の門戸を窺視せしのみにして、是より學ぶべきなれ、されば銳意勉勵奮闘して日進の學程に後れざらむ事を期すべく、世の所謂名ふりて實の退く徒に終るなく、今後益々諸先生及諸君の指導を得て研究の歩分を進め、今日の光榮に報ひむ事を期す希くは諸君微意の存する所を察し言の及ばざる所を許し給はむ事を、

閉會の辭

金子博士

閉會の辭を述べし榮譽を以て再び本會の美しき閉會の辭をなすの榮榮を喜ぶ、本會を開催するや、連日の黒雲は散じて晴明なる松原日和を示し風光明眉なる兼六の園は一層嵩高を増して、心よりの會員を迎ひ、吹く風、鳴く鳥、一として本日の祝賀を呈せざるはなし、是一重に松原博士の徳風の至す所と云ひ亦會員諸君の熱情の至す所と信ず、ざるを斯くも壯嚴に満足に終了し得しは全く博士の徳と會員の赤誠に報ゆるの天祐と云はずして何ぞ、茲に委員を代表して閉會の辭を述べ博士及御家族の來臨を謝し會員諸君の熱情を多謝す、願はくは、開かるべき餘興に胸襟を開き樂しき本會を金ふせられむ事を望む。

美しき會は、かくて祝賀の式を了りぬ、こゝに於て金子博士の發聲の下にて

一同この名譽ある博士の萬歳を三唱して前途を祝せり。

やがて式場は餘興の舞台に變下、柔道試合は初まり、綱曳きの競技は演ぜられぬ。役者は學生諸君、お客様はフロックのに父うさん達、お髯の塵を拂はせ給ひ、他愛もなく觀覽に餘念なく、場外また市民の群集人山を築きて立てり。各携擬店の繁昌は目の廻る程にて、夏蜜柑、滅多汁、黍饅頭、サイダー、赤飯ありて、我れ人共に無邪氣ふる骨肉を満足せしめ、半日の清遊を恣にし歡を盡して散會せしは、夕日西にかぐろいて兼六の池面漸く黃昏るゝ頃ふりき。

これより鑿き、半千の學生は崇師の赤心、青春の氣概、感更らに深きものあり、乃ち博士を擁し、樂隊に連れて左の歌を歡呼し、再び博士の萬歳を三唱して金子博士等と共に列を整へ、博士をその邸に送り、邸前又々唱歌萬歳、深く祝意を捧げて解散せり。暗澹として浮めるが如き夕暮はイグシオンの夢の如く、この光輝ある記念日を抱き去らんとすれば面白や、星はさしやき、燈は笑ひ、鐘は讚美の聲を傳へぬ。

一
橄欖の影恍として
我命の君が教へたる
げに古のローマ府も

祝賀の歌

(吉田二芳子作)

ハレーの光匂ふさき
現實の華を尊まけれ
豈一朝のものふらん

二

祝へや謳へ鞞轡を
歡樂の山みどりして
こもろは何れ千年の
波の穂吹雪するがごと
自由の空にかける鳥
松に不朽の色濃し

(春爛漫の節)

因に本日餘興として提灯行列の催しある筈なりしも、我か親善ふる 大英

國皇帝崩御の報到れるの際(いまだ公報には非らざるも)我等は全盟國民として、且つは我が 聖上陛下の御軫念に對し奉り恐懼の念措く能はず特にこの催しを遠慮し奉る旨金子博士より發表せられ遂に他日を期して行ふこととせり。

祝賀會々員名及會計報告

は後日本誌上に掲載する事とし今は祝賀會委員として萬端の設備に勉め給ひし方々の芳名を録す事とふし

祝賀會委員役割

會場係、加藤慶三、岡本京太郎、深美貞之助、水井時方、

醫四、馬詰定衛、太田尙男、山崎重治、和田政範、

醫三、小泉與四郎、佐藤彌一郎、村松純吉、

醫二、今村鐵夫、高崎文雄、行事喜作、

醫一、篠岡良作、宮内吉太郎、茂木留吉、

藥、柴田寅次郎、

接待係、米村吉太郎、八田智証、田中正一、林篤、津田三郎

醫四、矢吹清、吉川六郎、奥山義盛

醫三、岩瀨國義、重森平一郎、

醫二、島豐喜、丸山浩平、高橋房太郎、岩田高明、

醫一、森部令次、森薫、石坂正義、

藥、今澤義三郎、

餘興係、三木榮末、鷺山謙吉、鈴木定友、

醫四、北川與一、絹川義温、角田眞一、深田

醫三、富永富久三、米多外男、中原重吉、

醫二、木下潔、河口二郎、宇山春禱、

醫一、山村茂一、長谷川一郎、田中吉左衛門、

藥、佐々木武雄、

會計及庶務係、田中一次郎、福田美明、石川精一、

醫四、中村喜太郎、吉田圓磨、北川文松、

醫三、延川靖、住田立、

醫二、島居環、

醫一、廣松朝三、橋本正雄、

藥、五十嵐健太、

祝賀提灯行列

大英國皇帝陛下崩御の爲め遠慮延期中の所六月十一日午後七時より特別會員學生團等、相集り盛大勇壯なる提灯行列を催し松原博士邸前に至りて萬歳を三唱して散會せり詳細は次號に記載すべし。

* * * * *

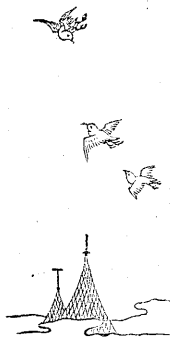
會 告

● 自明治四十三年四月廿七日
至全 七月十三日 校外十全會費納付調書

金額	期限	氏名
金參圓	自四十三年度三ヶ年分	和泉松次郎君
金參圓	至四十五年度	楠本晋平君

(會告)

金參圓	自四十三年度五ヶ年分	富澤圭太郎君
金四圓	自三十九年度四ヶ年分	山口敏雄君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	中野方幸君
全	至四十一年度	小島佐藏君
金貳圓	自三十八年度二ヶ年分	搦井竹次郎君
金參圓	自四十四年度三ヶ年分	並河權六君
金參圓	自四十二年度五ヶ年分	橋本喜久三君
金五圓	自三十七年度五ヶ年分	佐伯亮齊君
金五圓	自三十九年度五ヶ年分	須田嘉三郎君
金參圓	自四十三年度三ヶ年分	白石福三郎君



廣告

○先般故小川教授銅像建設報告書印刷相成候に就き釀金者各位へ發送仕候處左記諸氏宛のものは住所變更等の爲め不明の故を以て返戻し來り申候間諸氏には直に現住所御一報被成下度若し又會員中御承知の方も有之候は、何卒御一報の勞を煩はし度願上候

浦生 翼君 三輪 俊雄君

横田 彌吉君 北市 雪君

○尙釀金額及各芳名は本誌第五拾八號并に別刷報告書の通に候も萬一誤脱等御氣附相成候は、御遠慮なく御申聞かせ被下度希望致候

○報告書印刷後左氏より釀金到來、茲に御厚志を謝し且つ公告候也

金壹圓也 大藪 關重君

明治四十三年七月十日

發起人總代 佐々木 達

次號雜誌發刊

九月二十五日

次號原稿之切

九月十日